令和2年度事業実績

本事業は日米協働により、ろう者の「相互の支援及び助言」(障害者の権利条約 24 条 3-a) ができる、国際性豊かなろう者を養成するプログラムである。同時に、ろう者が「最も適当な言語並びに意思疎通の形態及び手段で、かつ学問的及び社会的な発達を最大にする環境」(同 24 条 3-c) を日本で実現し、国際的支援ネットワークをつくることを目標とするものである。

2020 年度は、世界で唯一の、手話とろう文化をコアとするろう者の大学アメリカギャローデット大学と協働して、オンライン教育システム「COIL」を構築し、さらに日本から学生 1 人の研修も実現した。また国際性の基盤となる教養教育も手話で行った。

日本財団の前プロジェクトのおかげで育ったろう者は、社会福祉士・介護福祉士・特別学校教員として、ろう児・者のウェルビーイング向上のために活躍している。そのような成果が、本学に完全情報保障を確立し、今は法人の資金で継続している。このプロジェクトを発展させて、日本全国のろう者が誇りを持って当事者ソーシャルワーカーを目指すために、さらには国際性を身につけ、国外でも活躍できるようになり、国際的支援の輪を広げるために、本事業「国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成」を実施することになった。

前プロジェクトで立ち上げた「手話による教養大学」も英語やアメリカ手話をより強化して英語という音声言語が阻んでいるろう者の学士取得を助け、さらには豊な教養を基盤として国際性を高めることを目指して実施した。

2．事業内容詳細

(1) 手話による教養大学

「手話による教養大学」は、ろうの教授陣が手話で大学の科目を提供する日本で唯一のプログラムで、ろう当事者ソーシャルワーカーを目指す大学生に教養と国際性を身に着けさせる教育を行い、また一般のろう学生には手話でソーシャルワークを学んでもらい、支援者を目指してもらうことを目標とするものである。新型コロナウィルスの広がりで通学ができなくなり、断念した学外の学生もいたが、逆に地方の学生がオンライン授業ＣＯＩＬ (Collaborative Online International Learning) に参加したい、という声が上がるなど、全国展開の可能性が見えてきた。新型コロナウィルス感染防止のため入構禁止・オンライン授業となり、課題提示型授業（資料と課題を提示し、学生にリアクションペーパーや課題を提出させるオンデマンド型授業）となったため、受講生には本学として通信環境を整備した後、2021 年 2－3 月にオンラインも含む対面補講やそのための資料作成を十分に行った。ろうの講師たちの快い協力が得られたことは大きく、ここでも当事者の同じろう者の後輩を育てたいという意欲を感じた。ろう者の「相互の支援及び助言」(障害者の権利条約 24 条 3-a)の重要さ、同じ障害をもつ教師の重要性（第 24 条 4）が明らかになった。

受講生は本学学生がのべ 128 名、外部聴講生および特別聴講生がのべ 58 名であった。

新プロジェクト発信（広報・報告）のためのホームページも立ち上げた。

https://www.deafkokusai.com/college.html

本ホームページには適宜、新情報を発信できるようフェイスブックを連動させた。

https://www.deafkokusai.com/index.html

（2）ギャローデット大学との協働

ギャローデット大学との協同教育についてホームページを立ち上げて発信した。https://www.deafkokusai.com/coil.html

ギャローデット大学も新型コロナウィルスのパンデミックで全授業がオンラインになり、ＣＯＩＬ（Collaborative Online International Learning）の重要性はますます認識された。

Zoom を使って、日本の深夜、アメリカの早朝に会議を開き、日米の教員と、ＣＯＩＬの発案者であるニューヨーク州立大学のジョン・ルビン氏をゲストに迎えて、会議を重ねて準備を行った。

日本のろう者の教授陣による１５ユニットの授業の動画を作成し、日本手話にはアメリカ手話の翻訳、アメリカ手話には日本手話の翻訳を本編にワイプで挿入する作業を行った。さらにドキュメンタリー動画などに日英語の字幕を付ける作業や、文字教材も用意した。履修者としてはアメリカのろう学生（盲ろう学生を含む）１０名と、日本のろう者９名が登録した。日本財団の奨学生としてギャローデット大学で学び、現在ギャローデット大学の教員になっている高山亨太氏が指導に当たってくれた。

同時双方向の授業は９０分二回、それ以外は小グループの学生同士の交流を重視し、ＳＮＳを使った時間差ディスカッションを積み重ね、教師たちがモニターし、アドバイスした。学生は 10 月末～12 月までの 8 週間、毎日のつながりで、学びを深めた。

一方、デフファミリー出身で、日本手話者である日本社会事業大学の学生を、ギャローデット大学にて研修させた。新型コロナのパンデミックのため、８月末の新学期に受け入れられてから、オンラインで授業に出席した。その後、１０月末、本人の希望により渡米することになった。時差が 13 時間あるため健康上の心配があり、また手話による学びは対面でないと大きく情報量が減少するので、アメリカのろう者と直接コミュニケーションをとれるように配慮することも必要であることから、大使館等のアドバイスを受けながら、双方の担当教授で話し合い、渡米させることに決定した。疾病も含めた十分な保険に入るため、日本財団の担当者の方にお願いして、予算の組みなおしを許可していただいた。学生寮ではなく、特別にギャローデット大学の先生のご自宅にて責任をもって預かっていただけることになった。前述の高山氏を含め、先生方に特段に面倒を見ていただき、大変元気によき学びをしたとの報告があった。予算は 2020 年度内に執行し、往復のチケットも購入し、年度末（５月）まで滞在し、まもなく帰国する。

この学生は日本財団「日本社会事業大学聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」の「ろう・難聴の塾」で学び、その後本学で同プロジェクトの支援と「手話による教養大学」によって３年次まで勉強した学生である。学業の傍ら、大統領選の激動のワシントン D.C.から、定期的に報告動画を全国に向けて発信してくれた。https://www.deafkokusai.com/index.html

また、ギャローデット大学および世界に日本手話を発信するためインスタグラムを立ち上げ、本学のろう学生が発信した。

３．総括

ろう者はマジョリティーたる音声言語話者と別の言語を持ちながらも、聴者社会の中でコミュニケーションをとりながら生きている。このコミュニケーション力は日本社会で現在切望されている多文化ソーシャルワーカーの資質と言える。しかし英語という音声言語が必須であるために、ろう者には高等教育を受けるのに大きな不利益がある。英語の読み書き力が十分身に

つけば、大学卒業も容易になるし、国際的に活躍することも夢ではない。
本事業の一つの柱、「手話による教養大学」は、ろう者に英語を始めとする教養教育を提供し、全国のろう者に単位互換制度で大学を卒業する可能性を高めるものである。またギャローデット大学の学生が履修した場合も単位互換制度によりギャローデット大学の卒業単位に含めることになっており、COIL も手話による教養大学の科目（すなわち教授会で定められた日本社会事業大学社会福祉学部の科目）という位置づけになっている。「手話による教養大学」の COIL 以外の科目も 2021 年度から教員間の教材・教授法での協働・互換等を行う方向で話し合いを進めた。COIL という海外と協働できる新たなオンライン教育の方法による協働科目は、シラバスのすべてをギャローデット大学と日本社会事業大学との協同でデザインしたものである。「手話による教養大学」で語学力、国際性の基盤となる教養を身に着けさせ、COIL で日米協同のろう者学に基づく当事者ソーシャルワーカー教育につなげていくものであり、初年度はそのプログラムデザインが確立された。
さらに、日本財団の前プロジェクト「日本社会事業大学聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」で育った本学の学生が、ギャローデット大学に渡って、英語・アメリカ手話・ソーシャルワーク・ろう者学を学んだ。
日本財団の前プロジェクトが評価され、高校・大学を卒業した後の生涯教育を考える実践研究が、文科省の助成研究事業として私立大学で唯一採択された。その事業が三年目になった本年は聴覚障害の学生たちが、支援者と協力して支援の改善に努めたり、全国の受講生にオンラインで手話を教えたりした。また視覚障害者のためのデータ作成などでも活躍してくれた。本学の聴覚障害の学生たちのこれらの活動も教養教育・国際教育に連動したものである。

４．成果

１．ホームページを作成し、適宜広報や事業の報告・成果をフェイスブック・インスタグラムに公表した。
２．前プロジェクトから、新プロジェクトへの進化を日本社会事業大学研究紀要６７号「日本財団『聴覚障害者大学教育支援プロジェクト』１０年の歩み」（斉藤くるみ著）にて発表した。
３．2020 年 12 月 12 日（於日本社会事業大学文京キャンパス）にて日本手話学会の基調講演として「国際教育と教養教育と手話研究～COIL による日米協同教育」（斉藤くるみ）を講演、またギャローデット大学国際部長チャールズ・レイリー、日本社会事業大学斉藤くるみ、ギャローデット大学高山亨太、アメリカ滞在中の本学の学生鈴木美沙、日本とアメリカの COIL 履修生たちで、シンポジウム「ギャローデット＝社会事業大学協働授業の試み」を行った。

その他資料を添付する。
①事業内容詳細（手話による教養大学）
②成果（日本社会事業大学研究紀要第６７集）／基調講演（資料）／シンポジウム（資料）
③統括（COIL のバイリンガル教材）

連携してプログラムを推進してくださったギャローデット大学の先生方には格別のご配慮をもって学生を預かっていただき、また帰国後スムーズに勉学に戻れるよう無料で二度の新型コロナワクチンの接種までさせていただきました。ここに謝意を表します。
何より、このような貴重な機会を与えてくださった貴財団に心より感謝を申し上げます。

日本社会事業大学は、日本財団の助成を得て、2020年4月より「手話による教養大学」を基盤として、日本手話によるろう者のための教養教育プログラムを世界に向けて発信しています。

また、世界で唯一のろう者のための総合大学 米国ギャローデット大学のソーシャルワーク学科と協働して COILによるオンライン授業で、両大学の学生が交流しながら学びを深め、さらには、両大学のろう者の留学も促進することで**「国際的視野を持つ当事者ソーシャルワーカーの養成」**に努めています。

お知らせ

2020.10.30　手話に興味のある方、ろう者の方、入試相談ができます。
連絡先：聴覚障害支援プロジェクト室
fax：　042-496-3081
メール：projectd@jcsw.ac.jp

facebook

聴覚障害者大学教育支援プロ…
このページに「いいね！」　721 件の「いいね」

聴覚障害者大学教育支援プロジェクト
約2週間前

日本社会事業大学の「手話による教養大学」申し込み受付中です。

手話による教養大学は、各分野の第一人者であるろう者教員が手話で授業を行います。

今年からオンラインで地方の方も受けられます。… もっと見る

DEAFHOHPROJECT.COM
手話による教養大学 概要 – 聴覚障害者…
手話による教養大学 概要 「手話による教養…

INSTAGRAM

Google Classroom

JCSW 日本社会事業大学 Japan College of Social Work

聴覚障害者大学
教育支援プロジェクト

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

手話による教養大学

手話による教養大学　～　ろう者が教え、ろう者が学ぶ

2009年に始まった日本初の　"教授陣も受講生も日本手話者" という教養教育プログラムです。法学・自然科学・英文学・経済学・舞踏・手話言語学・アメリカ手話など、さまざまな科目において、その分野の第一人者として活躍するろう者が日本手話で授業を行なってきました。

受講生は日本社会事業大学で福祉を学ぶ学生と、他大学の学生や社会人です。大学の規則に則り、授業や試験が行われ、日本社会事業大学以外の大学でも単位互換制度により単位が認定されます

手話で教養豊かな国際人をめざそう

手話による教養大学では、ろう者の教師が日本手話で講義を行っています。また、日本社会事業大学 社会福祉学部では、日本手話を外国語科目とする入試も行っており、入学後は、プロの手話通訳者やパソコンテイカーがついた授業で学べます。アメリカ・ワシントンD.C.のろう者の大学ギャローデット大学との協働授業も履修することができます。「手話による教養大学」で英語やアメリカ手話を学び、ギャローデット大学への留学を目指すこともできます。

「国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー 養成」
プロジェクトリーダー　斉藤くるみ

国際基督教大学で英語・言語学を学び、英国ケンブリッジ大学留学中に修道院の手話に出会い、以来、手話言語学の研究をしながら、聴覚障害をもつ高校生・大学生の学習権を守る活動に携わってきた。日本社会事業大学福祉学部教授。日本手話学会副会長。『少数言語としての手話』（東京大学出版会）の著作。

私たちが手話で教えています

佐野　正信

翻訳家
「映画で英語を学ぶ」「英語B」「英語A」

末森　明夫

産業技術総合研究所バイオメディカル研究部門主任研究員、日本手話学会会長、ろう史研究家
「進化 - 進化学及び系統学的思考」

角　祐樹

日本手話講師
「初級日本手話」

袖山　由美

アメリカ手話通訳、国際手話通訳、キッズイングリッシュ教室主催

「初級アメリカ手話」「中級アメリカ手話」「上級アメリカ手話」

高山　亨太

ギャローデット大学 大学院　ソーシャルワーク研究科長、精神保健福祉士・社会福祉士
「聴覚障害ソーシャルワーク総論」

雫境

聾の舞踏家、舉・主宰
「舞踏A -自分のからだと向かい合う」「舞踏B -間を見つめる」

中野　聡子

群馬大学 共同教育学部特別支援教育講座 准教授
「ことばとこころ」

森　亜美

英語・アメリカ手話教師
「初級アメリカ手話」「英語A」

森　壮也

日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター主任調査研究員
「手話学 · 音韻・統語」「社会福祉調査法」

若林　亮

弁護士
「法学」

50音順、2020年10月現在

日本手話が苦手な方のために手話通訳のつくバリアフリークラスの授業もあります。（清瀬キャンパス）

木下知威　「建築と科学・自然」「メディアと世界」
前田晃秀・福島智　「盲ろうコミュニケーション支援論」
吉川あゆみ　「情報保障」

私たちがプロジェクト室のスタッフです

コーディネーター・手話通訳士
日置　淑美

プロジェクト室では聴覚障害学生の情報保障支援を提供してきました。コーディネーターとしては、パソコンテイク・手話通訳・ノートテイクとニーズに合わせて配置することが重要です。

また、先生方・支援者・学生との信頼関係を構築することも心がけてきました。

今後は英文科卒の能力も活かして、国際性を身に着けた聴覚障害学生を養成するよう、新プロジェクトに貢献していきたいと思っています。

ソーシャルワーカー
守屋　敬介

日本社会事業大学を卒業し、現在は大学院生です。

大学院入学後フィリピンに行き、現地の特別支援学校でろう児の指導をするなどの活動を２年間行いました。

プロジェクト室では、ろう当事者として、ろう学生の授業や学内生活に関わる相談など、サポートを行なっています。

私たちが学んでます

岩泉　萌

私は、福祉の勉強ができる高校に通っていたため、将来は児童福祉の勉強がしたいと思い、福祉の勉強ができる大学を探したところ、日本社会事業大学があることを知りました。自分は聴覚障害を持っているため、少人数制である日本社会事業大学で学びたいと思い、社大に入りました。

将来は、まだはっきり決まっていませんが、ろう学校の先生になるか公務員になるか迷っています。

宇田　旬佑

私は将来、社会福祉士として、障がいを持つ人や生活困難に直面している人に向き合い、サポートしたいと思っています。

社事大は少人数制での授業を行っているため、自らの意見を発言する機会が沢山あり、きめ細やかな指導を受けることが出来ます。その上実習教育に力を入れているため、講義や教科書だけでは身につけられない知識や技術を身につけることが出来ます。そのようなカリキュラムは身体や手を動かしながら理解していく自分のやり方に適していると思いました。

また、本学は手話を語学として、大学のカリキュラムに取り入れています。ろう講師による講義もあります。母語である手話での講義を受けられ、自由に質問、意見の主張が可能であることに魅力を感じました。以上の理由から、本学へ進学することを決めました。

瀧澤　雅樹

私は、オープンキャンパスで手話言語学の斉藤先生と出会い、いろいろ話を聞いたり、情報保障や手話による授業が受けられることがポイントだったので、社事大に入りました。
将来は、教育に携わる仕事がしたいです。

ろう者である私から見た社会はまだまだ偏見や差別で溢れていて、特にマイノリティの存在は見過ごされているように感じます。コミュニティから孤立していくろう者も、私はこの目で見てきました。

この大学でいろいろ勉強をし、少しでも社会に発信できるように、啓蒙活動をしていきたいです。

ろう者・難聴者のみなさん、ぜひ社事大に入って一緒に勉強していきましょう。

西脇　将伍

あらゆる分野で活動されている錚々たる講師によって行われる"手話による教養大学"に私は惹かれました。第二外国語にあたるASLを習得することで、各国のろう者と繋がることが可能になり、ろう者に関する学問も深く学べるため、当事者である自分の可能性を広げられると考えました。

また、社会的弱者という同じ立場に置かれているあらゆる障害者にも関心があり、社事大の豊かな社会福祉のカリキュラムで幅広く学ぶことによって、マイノリティの視点から社会を良くするヒントを得られると思います。

今では、障害者の理解が普及し、社会は変わりつつあります。しかし、ろう学校の現場では、聴者のように音声で喋り、聴くことに重点が置かれ、ろう文化がぞんざいにされている現実があり、そのことは、未だ障害者が否定的にとらえられているからでしょう。そこで将来は、社事大で学んだことを活かし、自分にできることを模索していきたいと考えています。

そして私は、ろう児が生まれてきたら、"おめでとう、ろう者の世界へようこそ"と心から言えるような世の中にしたいのです。

藤井　太陽

これまで、ろう者である私が、障がいや社会福祉などに関することを学ぶ機会はありませんでした。社事大に入ることで新たな考えが生まれるだろうと、期待して入学しました。

ろう者である私を障がい者とみることはなく、聴者と同じ立場で講義を受けられることが大きいです。

将来は、私のようなろう者が困っていることがあれば、すぐ助けるということをしたいです。特に、日本手話という言語を社会に普及させていきたいと思います。

"日本手話は言語であり、ろう者の誇りである"

増田　菜央

以前より人と関わることが好きで、発展途上国の支援にも関心があったため、福祉がいいかなと思ったこと。また情報保障が他の大学と比べて進んでいるため社大への入学を決めました。

大学に入っていなかったら別の自分として人生を歩んでいたと思うほどとてつもなくデカい経験ができました。

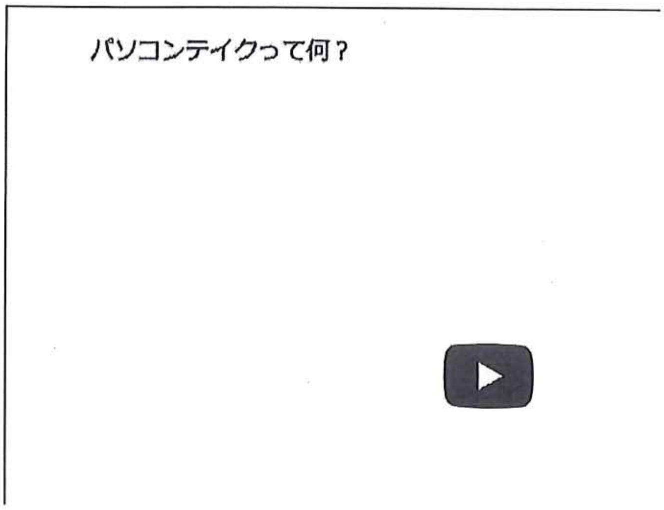
将来は、当事者でもあり、私だからこそできることを、発展途上国で誰もが輝ける人生を送れる環境をつくりたいと思っています。

支援者を目指すスキルを学ぶ

コミュニケーションバリアフリー課程は、聴覚障害者支援のスペシャリストを目指すための課程です。
手話通訳・パソコンテイク・盲ろうコミュニケーション支援などにチャレンジしてみたい方を募集しています。

https://deafhohproject.com/bp/

パソコンテイクって何？



Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

COIL・ギャロデット大学

COILとは　ギャロデット大学について　COIL講師

HOME > COIL・ギャロデット大学

COILとは

Collaborative Online International Learning の略で、ICTを用いて、バーチャルに国境を越えて、学生たちが交流学習 を行う活動です。本プロジェクトでは、2020年４月より、米国ギャロデット大学と日本社会事業大学の教授陣が、COILの発案者であるニューヨーク州立大学COIL センターの所長Jon Rubin氏をゲストに迎え、オンライン会議を進め、双方のろうの教授陣によるオンデマンド動画や執筆教材を準備してきました。オンライン授業はどこにいても見られるもので、コロナ禍においても、リモート教育として確立しました。

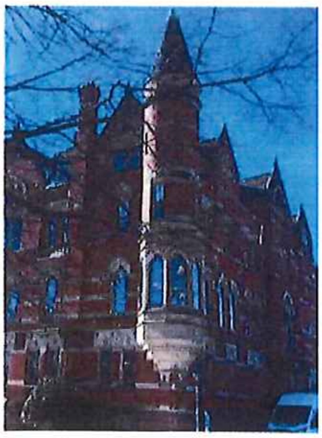
ギャロデット大学について

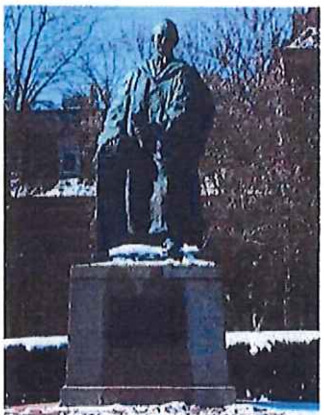
アメリカ合衆国ワシントンD.C.にあるろう者のための大学です。世界で唯一のアメリカ手話を教育言語・生活言語とする大学で、教授たちは手話者（多くはろう者）、授業はアメリカ手話で行われます。150年の伝統をもち、歴史的建物はとても美しく、キャンパス内にはホテルもあり、まさにろう者のユートピアです。ろう学生にとって完全なバリアフリー環境があるため、全米から学生が集まる他、25ヵ国以上から留学生が集まっています。

ギャロデット大学の教員であった言語学者ウィリアム・ストーキー（William Stokoe）が1960年に発表した論文「手話の構造」から、手話を自然言語として研究することが始まりました。今ではろう者が自然に生み出した手話が自然言語であることは、世界中の言語学者が認めるところです。

1988年のDeaf President Now Movement（「今こそろうの学長を」運動）はＡＤＡ（障がいを持つアメリカ人法1990年）に結びついたとも言われています。今も卒業生は全米で、そして世界中で、ろう者の権利を守るために活躍しています。

https://www.gallaudet.edu/





COIL講師

Charles Reilly, Ph.D.
チャールズ・レイリー

Project Leader
Senior International Officer
Office of International Affairs / Research Support & International Affairs (RSIA)
ギャローデット大学 国際部長（研究支援・国際部）

Kurumi Saito, Ph.D.
斉藤くるみ

Project Leader & COIL Coordinator
Professor of Faculty of Social Welfare, Japan College of Social Work
Vice-President of Japanese Association for Sign Language Studies
日本社会事業大学 社会福祉学部 教授
日本手話学会 副会長

Kota Takayama, Ph.D.
高山　亨太

COIL Coordinator
Chair, The Graduate School, Department of Social Work, Gallaudet University
ギャローデット大学大学院 ソーシャルワーク研究科長

Lindsay Dunn
リンゼイ・ダン

Lecturer of Department of Deaf Studies, Gallaudet University
ギャローデット大学 ろう者学部専任講師

Brian Greenwald, Ph.D.
ブライアン・グリーンウォルド

Professor of Department of History, Gallaudet University
ギャローデット大学 歴史学部教授

Ikumi Kawawata
川俣郁美

日本財団 職員

Harumi Kimura
木村　晴美

NHK手話ニュースキャスター
国立障害者リハビリテーションセンター学院 手話通訳学科教官
学校法人明晴学園 理事

Carolyn McCaskill, Ph.D.
キャロライン・マカスキル

Professor of Department of Deaf Studies, Gallaudet University
ギャローデット大学 ろう者学部教授

Elizabeth Moore, Ph.D.
エリザベス・ムーア

Interim Chief Diversity Office Division of Equity, Diversity & Inclusion, Gallaudet University
ギャローデット大学 ダイバーシティ部長

Seiko Mori
森　せい子

聴力障害者情報文化センター 聴覚障害者情報提供施設 施設長
精神保健福祉士・介護支援専門員

Laurene Simms, Ph.D.
ローレン・シムズ

Professor of Department of History, Gallaudet University
ギャローデット大学 教育学部教授

Akio Suemori, Ph.D.
末森　明夫

産業技術総合研究所バイオメディカル研究部門主任研究員
日本手話学会 会長
ろう史研究家

Hiroshi Tamon
田門　浩

弁護士

Yasuyuki Toda
戸田　康之

坂戸ろう学校 教諭
NHK手話ニュース キャスター

アルファベット順、2020年10月現在
Alphabetical order by surname, as of October, 2020

ギャローデット大学　高山先生による大学の紹介（2020年7月）

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

コラム

第1回　(2020年10月)

「ろう文化」と子どもたち

『「ろう文化」案内』（原題：*Deaf in America*）はアメリカの多くの手話通訳の学科で教科書になっている本です。著者のキャロル・パッデンとトム・ハンフリーズは研究者夫妻です。日本語の翻訳も日本社会事業大学「手話による教養大学」の講師である森壮也さんと森亜美さんご夫妻がされました。お二人はろう者で、アメリカ留学歴もあり、アメリカ手話にも堪能です。

この本の中に、ろう児についての以下のような記述があります。

> p.40、l.3～
> 自分たちの言語についての世間一般の見方を学ばなければならなくなる。人物や出来事について詳しく描写するというような家の中で覚えた技を、その言語を知らぬ教師が評価してくれることはなかった。彼の手話は、それよりも大切だと見なされている活動、とくに「残存聴力を使って」「話す」ことを学ぶことよりも下位にあることだとされてしまったのである。
>
> P40、l.12.
> 学校という異文化の組織は、その権力的な制度、聴者教員の採用から口話への固執にいたるまで、いやおうなしにこれまでの世界とはまったく異なる社会を受け入れねばならないということを、子ども心にも分からせる。子どもたちの知り合いの大人で、学校で働く、自分がろうであると自覚している人でさえも、自分のコミュニティでいつもしているようにはふるまわないし、できないのである。ほとんど聴者が支配している学校の要求を目の前にすると、彼らは自分の役割を変えざるを得ないのである。
>
> p.41、終わりの5行
> 学校でこのような発見をする場合が多いということは驚くに当たらない。学校はろう児が聴者（OTHERS）と出会う場所であるというのは当然だが、それだけでなく、聴者が違う考え方をもち、その考え方が学校では有力なのだと、入学したときに思い知らされる場所でもある。

聴者の多くは、ろうは文化だとか、日本手話は言語だということを、なかなか理解できません。「障害を文化と言ってしまうと他の障害について説明がつかない」とか「聞こえないことを文化と考えることには賛成できない」と簡単に白黒つけてしまいます。

ろう者が、「わざわざ孤立するようなことを言っている」、「もっと解り合おうとすべき」「もっと歩み寄ろうとすべき」とマジョリティーは言います。

しかし、私たちと違って、聞こえない子どもたちは、聞こえる身になれなくても、聞こえないということと、聞こえるということと、二通りあることを幼いころに理解するのです。私たちマジョリティーには、残念ながら、マイノリティーのことを理解するチャンスが多くありません。

INDEX

第5回（2021年2月）
文化としての「ろう」

第4回（2021年1月）
手話スタバ

第3回（2020年12月）
聞こえない赤ちゃんを産む選択

第2回（2020年11月）
盲文化

第1回（2020年10月）
「ろう文化」と子どもたち

「ろう」に限らずあらゆるマイノリティーはある年齢になると、４～５歳で近所の子どもと接触するとか、学校に入学するとかして、マジョリティーの世界の存在を知ります。逆にマジョリティーはマイノリティーの存在に気づきもしません。マイノリティーが自身の存在を主張したら、マジョリティーのほとんどは批判を始めます。〇〇のくせにアイデンティティーを主張するな、とばかりに。

マジョリティーは数が多いか少ないかだけではありません。例えばガンジーが率いたインド人は圧倒的多数であるにもかかわらず、抗いきれない大きな権力で虐げられていました。イギリス支配下のインドでは、インド人が自分たちの国だ、などと主張すれば、大砲に括り付けられて、体をこっぱみじんに吹き飛ばされる処刑までありました。

マジョリティーかマイノリティーかは、「数」によることが多いですが、それ以外に権力、武力、経済力などの要因もあります。いくつかの要因が複数重なっている場合も多く、つまり本質は「強弱」や「上下」なのです。

マイノリティーの人たちは、多かれ少なかれ、必ずマジョリティーに合わせなければ生きていけません。一方で、マジョリティーはマイノリティーに合わせることが得意ではないのです。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

コラム

第２回　(2020年11月)

盲文化

障害という「文化」を認めるとき、そして、それが認知的に必然性をもつ文化であると気づくと、親子が違う文化をもつとき、どのような問題が起きるのか、どのように社会を変えなければならないのか、ということが見えてきます。（親もろうというろう児、親も盲という盲児は超マイノリティです。）

全盲の研究仲間がこんな話をしてくれたことがあります。彼は昔、病院で失明の告知や失明した人や子どもの生活支援をしていました。医者は「あなたはもう見えるようになりません」という告知が、なかなかできないのだそうです。自分で自然に受け入れられるようになるまで... などと言っていると、一年も二年も訓練が遅れてしまいます。そこで彼は、見えない世界に早く慣れましょう！と、告知する役割を担っていたのですが、患者さんは「貴方に私の苦しみがわかるのか」と反発します。そこで「私も失明したことがあって、今はまったく見えていません。でも一人でこうして働いていますよ。」と言うと説得力があるということでした。

彼によると、小児がんなどで失明の危機にある子どもの親は、成功率が１％ほどだと言われても、子どもに放射線治療を受けさせたり、真っ暗な部屋に２週間置くというような治療をさせる方を選ぶそうです。１％でも「見える」可能性があるのなら、そちらに賭けると。彼からみれば、眼球を摘出するほうが、ずっと安全で、一日も早く盲として生きる訓練ができていいのになあ、と思うのだけれども、見える親は、なかなかそういう気持ちになれないそうです。そして結局、親しか決められないのです。

盲文化というのも確かにあります。『さわっておどろく!　点字・点図がひらく世界』広瀬浩二郎、嶺重慎著 (岩波ジュニア新書)に著者である広瀬氏が書いた「闇の仕掛け人」という詩があります。広瀬氏は、１３歳の時に失明し、全盲です。

> 僕たちは実際に目に見えるものより、
> もっと広くて深い世界があることを知っている。
> すべての見えるものは、この見えない世界から発していることを疑わない
> そう、かつて琵琶法師やイタコは、視覚を使わない芸能と儀礼によって
> 見えない世界の豊かさ、鮮やかさを教えてくれた
> 闇で耳を澄ませば、広くて深い何かが見えてくる
> 全身で味わう闇のにおい、闇の手触り
> さあ闇の活力、闇から生まれる喜怒哀楽を取り戻せ
>
> 文明化とは何なのか
> 闇の意味を限定し、その可能性を否定したのは誰なのか
> 闇が光を駆逐する
> Touch Something Invisible!
> 今闇の反撃が始まる
> 静かに、そして大きなうねりとなって

INDEX

第５回 (2021年2月)
文化としての「ろう」

第４回 (2021年1月)
手話スタバ

第３回 (2020年12月)
聞こえない赤ちゃんを産む選択

第２回 (2020年11月)
盲文化

第１回 (2020年10月)
「ろう文化」と子どもたち

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

コラム

第３回　(2020年12月)

聞こえない赤ちゃんを産む選択

私たちが世界を感じる（音を感じる、光を感じる、触って感じる、匂いで感じる）仕方は、生まれ育った環境によるのです。

ろう児の親が聞こえる人の場合、我が子が別の文化をもつ、ということに気づくのは難しいし、苦しいことです。聞こえる親がろうの赤ちゃんを聞こえるようにしたい、と思うのは当然でしょう。障害者の権利を守ることや、まして文化として障害を尊重するなどということは、まだまだ日本社会には当たり前ではありませんから、親もろうを憐れんだり、蔑んだりする文化を持ってしまっているわけです。そういう親御さんの中には、手話を見るだけでおぞましく感じ、子どもに手話を見せない、覚えさせないという親御さんもいます。大手術をして人工内耳を入れさせることを、ろう者は、赤ちゃんがかわいそうだと言いますが、大多数の聴者はそうは思いません。赤ちゃんのうちに本人の意志に関係なく大手術をさせることを批判する聴者はほとんどいません。

では、裏返しならどうでしょう。あるろうのレズビアンのカップルが人工授精で子どもを出産したところ、ろうの赤ちゃんが生まれました。二人目の子どもをつくるときに、その子だけ聞こえたら家族としてよくないと思って、ろうの精子を探して人工授精で子どもを儲けました。ところがその子はろうではなく、訓練によりある程度聞こえる難聴でした。

このカップルは、難聴の第二子に補聴器をつけて訓練してしゃべらせたりはせず、ろう者として育てることにしました。これに対し、世界中から批判を浴びました。なぜろうの赤ちゃんを作ろうとするのか、なぜろう者に育てようとするのか、少しだけでも聞こえるなら訓練して聴者にすべきだ、と。

一方、ろう者からは、人工的に選んで人を作るということに対しての批判はあったものの、ろう児を望むことを批判はしませんでした。この事件は１５年前のアメリカの話ですが、当時日本の聴の学生たちは「なぜわざわざ障害者を作ろうとするのか。」と反発しました。ろうの人権を尊重し、ろう文化を尊重するということと、ろうの子どもを産もうとすることは別だ、と。「別じゃないと思うよ」という私に、彼らはなかなか理解を示しませんでした。

今の学生は、先進国では精子を選んで人工授精をする人もいるということを理解しています。そこは確かに時代が変わったと感じます。しかし、一昨年も、反対する聴学生に、ろう学生が「ぼくたちは要らないってことですか。」と言ったら、「そんなことは全く言っていません。生まれてしまった人を要らないなんて言ってません。でもわざわざろう児を作らなくても...」と、ますますろう学生を怒らせるような一幕もありました。

ろうの赤ちゃんに手術を受けさせ、その後、毎日毎日訓練して少しだけでも聞こえるようにしようとする聴の親、難聴の赤ちゃんを、訓練しないで、ろうとして育てるろうの親、どちらも他人が非難することはできないでしょう。

生まれてくる赤ちゃんが聞こえるといいな、聞こえない赤ちゃんが生まれると嫌だなと思う親はたくさんいます。そのことを責められることはまずありません。聞こえない赤ちゃんを産みたいと思う親は、なぜ批判されるのでしょう。胎児のときに障害がないかを調べ、障害があるとわかって、悩み苦しんだ挙句、中絶する親は年々増えています。

INDEX

第５回（2021年2月）
文化としての「ろう」

第４回（2021年1月）
手話スタバ

第３回（2020年12月）
聞こえない赤ちゃんを産む選択

第２回（2020年11月）
盲文化

第１回（2020年10月）
「ろう文化」と子どもたち

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

コラム

第４回　(2021年1月)

手話スタバ

ワシントンＤＣのろう者の大学ギャローデット大学の近くの手話スタバ。サイニングストアと言うそうです。店長さんはろう者で、店員には聴者もいますが、全員アメリカ手話ができます。この店がオープンしたのは、2018年10月。ろうのアーティストがデザインしたこのお店限定のマグカップを買いました。

ギャローデット大学のReilly教授と

昨年、日本でも東京の国立市にサイニングストアがオープンしました。
世界で5店舗目ということです。

＊サイニングストアとは、聴覚に障がいがある従業員が多く働くスタバのこと。

INDEX

第５回（2021年2月）
文化としての「ろう」

第４回（2021年1月）
手話スタバ

第３回（2020年12月）
聞こえない赤ちゃんを産む選択

第２回（2020年11月）
盲文化

第１回（2020年10月）
「ろう文化」と子どもたち

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

コラム

第５回　(2021年2月)

文化としての「ろう」

2006年に国連総会において採択され，2007年に日本も署名した障害者権利条約の中に、次のように謳われています。

> 第２１条　「表現及び意見の自由並びに情報の利用の機会」に
> (e)　手話の使用を認め、及び促進すること。
>
> 第30条４　障害者は、他の者との平等を基礎として、その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及びろう文化を含む。）の承認及び支持を受ける権利を有する。

ろう文化は地理的に、あるいは宗教的にできた文化集団とは少し違います。特に決定的なのは認知の違いです。日本のろう文化とアメリカのろう文化は違いますが、世界中どこのろう文化にも共通するものがあります。たとえば、拍手を音で聞かせるのではなく、手を上げてひらひらさせるなどして“見せる”とか、話しかけるときに肩を叩くのがあたりまえだったりします。第一回でもご紹介した『「ろう文化」案内』（原題：*Deaf in America*）の中に次のような記述があります。

> インディアナ州の中心部にある農場の、ろうの家族に末っ子として生まれた子の話を紹介しよう。ジョーはこう言っている。「私は六歳のときまで自分が聴者とは知りませんでした。自分が両親や兄姉と違うとは夢にも思わなかったのです。」
>
> 聞こえる子どもが自分が聞こえると言うことを知らない---　そんなことを想像するのは、馬鹿らしいと思えるかもしれない。そうした子どもは音に反応していないのか？聞こえる子が六歳のときに音を発見するなんてことがありえようか。当然そんなことはありえない。ジョーは音を知っていた。彼は音に反応したし、彼の概念世界には音が含まれていた。しかしふだんの生活の中で、音というのはたまたま音がしているという程度のものでしかなかった。おそらく、音について考えるとしても、子どもたちが足があることについて考える程度の頻度でしかなく、意識にのぼる度合いもその程度のものだったのだ。

> 「自分が両親や兄姉たちと違うとは夢にも思わなかったのです」と言った彼の言葉に、鍵となる部分がある。これはろうであるふりをしたということではない。**ジョーは聞きそこなったのではなく、たんに、家族の経験とずれないかたちで音を理解していたのである。**二重に解釈できるがどちらも正しいという子ども時代の彼の世界の現象がいかなるものだったか、次のように思い描くことができよう。
>
> スプーンが音をたてて床に落ちる。誰かがそれを拾う。それは音が聞こえたからでもあるが、落ちるのが見えたからでもある。農夫は牛の乳しぼりに出る。それは牛が鳴いたからでもあるが、夜が明け、乳しぼりの時間がきたからでもある。ドアが閉まり、風が部屋に入り、テーブルの上の物がガタガタ揺れる。多くの音と一緒に、耳で聞こえるのとは違う別のものごとが起きているが、ジョーは両親がこれらに反応して動くのを見たことだろう。彼の両親の世界からいつしか彼が学んだのは、何かが起きるときにはまず第一に音がするということではなかったのである。
>
> 耳の聞こえる子どもは、目の前の出来事とは関係ない音をどう理解するのだろうか。ドアが別の部屋でバタンと閉まったのに、家族の誰もそれに反応しなかったとしたら？彼は変だとも、矛盾しているとも思わないのだろうか。想像してみよう。子どもが大きな音にびっくりする。家族の方を見る。そして彼らが何とも思

INDEX

第５回（2021年2月）
文化としての「ろう」

第４回（2021年1月）
手話スタバ

第３回（2020年12月）
聞こえない赤ちゃんを産む選択

第２回（2020年11月）
盲文化

第１回（2020年10月）
「ろう文化」と子どもたち

わないのも不思議に思う。しかし、子どもに「不思議に思う」だけの土台がまだなければ、子どもにはその理由を説明するだけの力はない。驚くべきことに、ろうの親をもつ聞こえる子どもが、幼いときにじかに見てきたことについて、自分の両親はどこか普通じゃないという疑問を持つのは、さらに成長してからなのである。自分の家族の世界にどっぷり浸っている幼い子供たちには、矛盾が生じる余地はまだないのだ。

聴とろうの親子のように、一緒に暮らしているのに、極端に違う文化をもつことは珍しいです。障害という「文化」にはこういう特徴があります。もちろん、ろう者や盲人で、親もろう、親も盲、という人もいますが、超マイノリティです。しかし、この超マイノリティーこそが「障害の文化」を主張し、世に示す存在となるのです。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

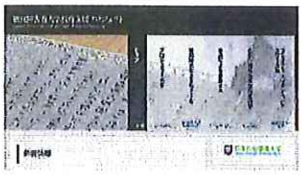
関連リンク

学ぶ　楽しむ

HOME > 関連リンク

学ぶ

聴覚障害者大学教育支援プロジェクト



日本財団の支援により、2009年から2019年まで、大学における理想的な情報保障（講義・演習・実習のパソコンテイク・手話通訳）のモデル化と発信、ろう・難聴の高校生の大学進学を実現する学習塾の開催、ろう教授陣の手話による講義、「手話による教養大学」の開講の３つを柱として、ろう・難聴の高等教育を支え、現在も活動を継続しています。

https://deafhohproject.com

聴覚障害者大学教育支援の紹介ビデオ（手話・字幕あり）

https://www.youtube.com/watch?v=n8hQcB_QwrY

日本手話-日本語 対比例文集

ろう者が生み出した手話と、日本語を手指記号にしたものは全く違います。木村晴美氏がその違いを動画で紹介しています。

https://www.youtube.com/playlist?list=PLzRWuW0dCSLQKHE-oTy-Xmy_26QLilWUS

NPO法人ろう・難聴中高生の学習支援の会

ろう・難聴の高校生の大学進学を手話による授業やPCテイク付き授業でサポートします。

https://npo-rounojuku.com

高卒認定対策プロジェクト

学校に行けない・行かない高校生も手話で学んで大学を目指しましょう。

https://deafhohproject.com/school/高卒認定対策/

楽しむ

ドラマ「ろう者たちのキャンパスライフ/Deaf U」

ろう・難聴学生のためのギャローデット大学で学ぶ若者たちが、それぞれの関心事や悩みを語り、大学生活を送る様子を追うリアリティシリーズ

https://www.netflix.com/jp/title/81035566

（画像はYouTubeのNetflix公式チャンネルより）

映画「ヴァンサンへの手紙」

監督から、今は亡き友人ヴァンサンへ、「ろう者の存在を知らせたい」という彼の遺志を継ぎ、10年間の思いを綴ったビデオレター。ろう者の抱える言葉にならない複雑な感情に"目"を澄ます。

https://uplink.co.jp/vincent/

（画像はアップリンク公式サイトより）

映画「エール」

フランスの田舎町。農家を営むベリエ家は、高校生のポーラ以外、父も母も弟も聴覚障害者。ある日、ポーラにはある才能があるとわかって。。。

https://eiga.com/movie/82203/

（画像は映画.comより）
© 2014 - Jerico - Mars Films - France 2 Cinema - Quarante 12 Films - Vendome Production - Nexus Factory - Umedia

映画「Beyond Silence」

ろうの両親と手話で話す少女ララを主人公に、両親との確執と和解、母親との死別などを乗り越え成長してゆく姿を描く。

https://movies.yahoo.co.jp/movie/83904/

（画像はYahoo! 映画より）

映画「LISTEN」

「聾者の音楽」を視覚的に表現したアート・ドキュメンタリー、無音の58分間。

https://www.uplink.co.jp/listen/index.html

（画像はクラウドファウンディングreadyforより）

映画「アイラブユー」

日本で初めて、ろう者と聴者の共同制作による映画。手話での演劇を目指す耳の不自由な女性と、彼女を巡る人たちとの心の触れ合いを描くヒューマン・ドラマ。

https://www.facebook.com/Movie.ILoveYou/photos/?ref=page_internal

（画像は公式facebookページより）

映画「ザ・トライブ」

全編が手話のみ、セリフが一切ないため、字幕も吹き替えも存在しない異色の映画。

https://eiga.com/movie/81564/

（画像は映画.comより）

映画「凱歌」

なぜ人間は差別や偏見を繰り返すのか。人間とは何か。国家の「終身隔離政策」の犠牲となり、子供を産む権利をも奪われたハンセン病元患者の姿を9年間撮影した坂口香津美監督の映画。斉藤くるみ監修　ろうの斉藤くるみゼミ生たちが出演。

公式ページ
https://supersaurus.jp/gaika/
クラウドファウンディングページ
https://motion-gallery.net/projects/gaikamovie

（画像は公式ページより）

雫境（dakei）

手話による教養大学の講師。国内のみならず欧米、南米など世界で活動するろうの舞踏家。2019年よりユニットグループ「濃淡（NOUTAN）」を新たに旗揚げ。

https://noutan-in-a-line.jimdosite.com

日本ろう者劇団

日本のろう者による劇団。1980年に黒柳徹子や米内山明宏らによって結成された。

http://www.totto.or.jp/02/index.html

手話狂言

日本ろう者劇団がレパートリーのひとつで、最も力を力を入れている。

https://www.youtube.com/watch?v=8sCEkMnZ5M8

DEAF WEST THEATRE

アメリカ・ロサンゼルスを拠点とした、聴覚障害者と健聴者が共演するアメリカの手話演劇カンパニー

https://www.youtube.com/user/deafwesttheatre
https://www.deafwest.org

(画像は公式サイトより)			
THE WILD ZAPPERS 全米初の聴覚障害者だけの、プロのダンスグループ https://www.facebook.com/WZ.NDDT/ http://www.invisiblehands.com/wildzappers.html	**セサミストリート** セサミの住人の一人にリンダというろう者がいて、一切喋らずに手話で会話をし、ときどき手話を教えてくれたりしている。 https://www.youtube.com/watch?v=QW3AyqZwdDg		

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Copyright © 2020 国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成 All Rights Reserved.

2019 年度　社会福祉学部【文京Ｃ】時間割

〔前期〕

	18:30～20:00	20:10～21:40
月		
火	角祐樹先生 「初級日本手話F」	若林亮先生 「社会の認識と国際理解XⅢ」 (障害法)
水	袖山由美先生 「初級アメリカ手話B」	袖山由美先生 「上級アメリカ手話」
木	雫境先生 「人間の知性と感性の認識XⅤ」(舞踏A-自分のからだと向かい合う-) ※4月25日より開講	
金		
土		

※7/3(水)は学内行事のため休講となります。
※4/30(火) [休日]、5/1(水) [新天皇即位]、5/2(木) [休日]は通常授業を実施します。

〔後期〕

	18:30～20:00	20:10～21:40
月		
火	前田晃秀先生・福島智先生 「人間の知性と感性の認識XⅨ」 (盲ろうコミュニケーション支援論)	
水	袖山由美先生 「中級アメリカ手話」 ※11月6日より開講	
木	佐野正信先生 「英語B11」	
木	雫境先生「人間の知性と感性の認識XⅥ」(舞踏B-間を見つめる-)	
金		
土		

※12/3 (火)、12/5(木)、12/11(水)は学内行事のため休講となります。
※10/22(火) [即位礼正殿の儀]は通常授業を実施します。
※「人間の知性XⅨ」については、本学受講生に聴覚障がい者がいた場合にのみ手話通訳が付きます。

2019 年度　社会福祉学部【文京Ｃ】集中講義時間割

	月日	曜日	1限 9:00～10:30	2限 10:40～12:10	3限 13:00～14:30	4限 14:40～16:10	5限 16:20～17:50
前期	4月13日	土		森壮也先生「人間の知性と感性の認識XⅧ」(手話学-音韻・統語)			
	4月20日	土		森壮也先生「人間の知性と感性の認識XⅧ」(手話学-音韻・統語)			
	5月11日	土		森壮也先生「人間の知性と感性の認識XⅧ」(手話学-音韻・統語)			
			末森明夫先生「科学的思考と自然の認識XⅡ」(擬態語および手話学における分類・系統・進化)				
	5月18日	土		森壮也先生「人間の知性と感性の認識XⅧ」(手話学-音韻・統語)			
			末森明夫先生「科学的思考と自然の認識XⅡ」(擬態語および手話学における分類・系統・進化)				
	5月25日	土		森壮也先生「人間の知性と感性の認識XⅧ」(手話学-音韻・統語)			
			末森明夫先生「科学的思考と自然の認識XⅡ」(擬態語および手話学における分類・系統・進化)				
	6月1日	土	佐野正信先生「人間の知性と感性の認識XⅣ」(映画で英語を学ぶ)				
			末森明夫先生「科学的思考と自然の認識XⅡ」(擬態語および手話学における分類・系統・進化)				
	6月8日	土	佐野正信先生「人間の知性と感性の認識XⅣ」(映画で英語を学ぶ)				
	6月15日	土	佐野正信先生「人間の知性と感性の認識XⅣ」(映画で英語を学ぶ)				
	6月29日	土	佐野正信先生「人間の知性と感性の認識XⅣ」(映画で英語を学ぶ)				
	7月6日	土	高山亨太先生 社会福祉特講Ⅴ「ろう者学総論」				
	7月13日	土	高山亨太先生 社会福祉特講Ⅴ「ろう者学総論」				
	7月20日	土	高山亨太先生 社会福祉特講Ⅴ「ろう者学総論」				
	8月5日	月		森亜美先生「英語B9」			
	8月6日	火		森亜美先生「英語B9」			
	8月7日	水		森亜美先生「英語B9」			
	8月8日	木		森亜美先生「英語B9」			
	8月9日	金		森亜美先生「英語B9」			
	9月4日	水	中野聡子先生「人間の知性と感性の認識XⅦ」(ことばとこころ)				
	9月5日	木	中野聡子先生「人間の知性と感性の認識XⅦ」(ことばとこころ)				
	9月6日	金	中野聡子先生「人間の知性と感性の認識XⅦ」(ことばとこころ)				
後期	10月5日	土		森壮也先生「社会の認識と国際社会XⅣ」(経済学の基礎-ミクロ経済学-)			
	10月12日	土		森壮也先生「社会の認識と国際社会XⅣ」(経済学の基礎-ミクロ経済学-)			
	11月19日	土		森壮也先生「社会の認識と国際社会XⅣ」(経済学の基礎-ミクロ経済学-)			
	11月2日	土		森壮也先生「社会の認識と国際社会XⅣ」(経済学の基礎-ミクロ経済学-)			
	11月9日	土		森壮也先生「社会の認識と国際社会XⅣ」(経済学の基礎-ミクロ経済学-)			

日本社会事業大学 文京キャンパス

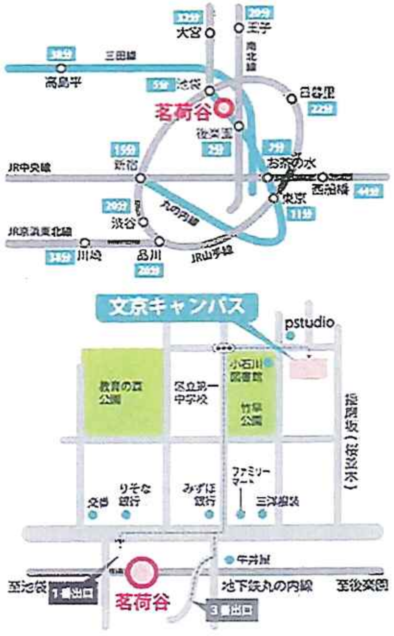
東京都文京区小石川 5-10-12

【お問合せ・お申込み】

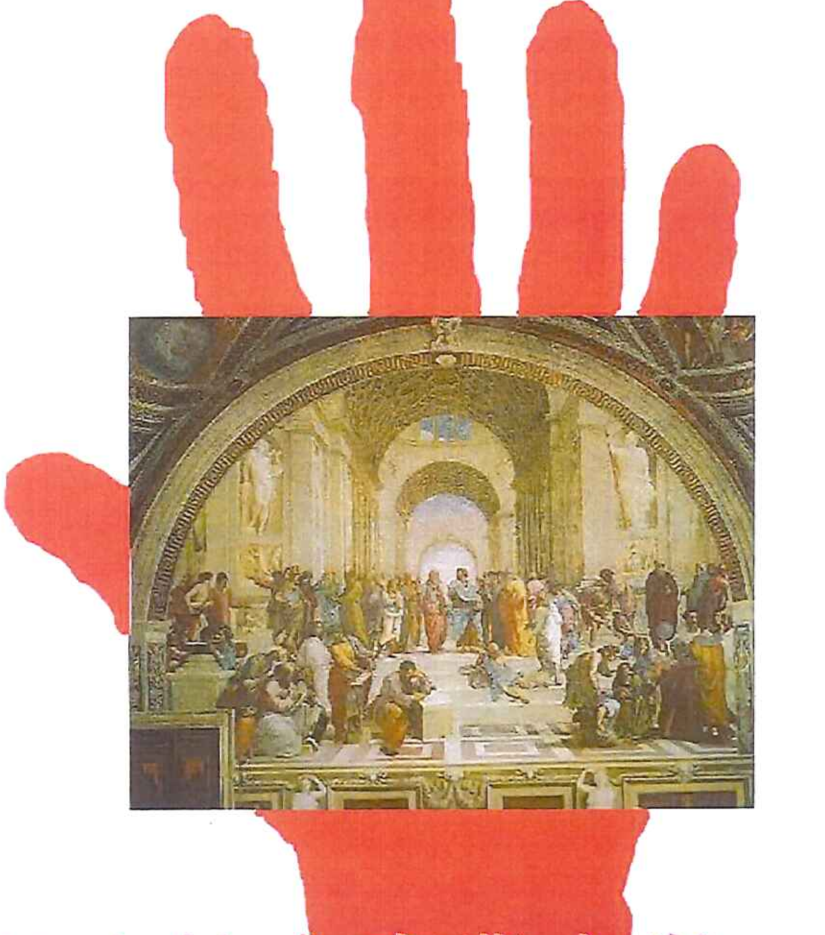
E-mail: projectd@jcsw.ac.jp

FAX: 042-496-3101

URL: http://deafhohproject.com/college/



日本語でも英語でもない。
手話で学ぶ教養がここにある。



日本社会事業大学

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

ろう者のための大学

日本手話による教養科目が、単位互換で、あなたの大学の単位とみなされます！！

ご挨拶

日本社会事業大学（文京キャンパス）では日本手話によるろう者によるろう者のための講義を提供します。講師はすべて各分野の研究において日本で第一人者であるろう者です。履修しやすい夕方以降の時間、あるいは土曜日に授業を配置していますので文京キャンパスにお集まりください。単位互換制度がある大学に在学していれば、在学している大学の単位になります。在学している大学で手続きをしてから履修の申し込みをしてください。同時に日本社会事業大学（清瀬キャンパス）では聴者の教授陣の授業にプロの手話通訳者・パソコンテイク等による情報保障をつけて提供しています。これらのプログラムは「日本社会事業大学聴覚障害学生支援プロジェクト」として日本財団にご支援いただいております。

企画担当
斉藤くるみ（日本社会事業大学社会福祉学部教授）
kurumi@jcsw.ac.jp
1990 年国際基督教大学大学院卒。
'88～'89、'93～'94 ケンブリッジ大学客員研究員。
PhD in Education（教育学博士）。
著書：*Nominal Modification in Old English*（＝古英語の名詞修飾）（UMI Michigan, USA）、『視覚言語の世界』（彩流社）、『少数言語としての手話』（東京大学出版会）他

講　師　紹　介

森　壮也　（日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター主任調査研究員）、早稲田大学大学院卒、1992-1994 年　ロチェスター大学(UR)留学, 1995 年ニュー・メキシコ大学留学、国際開発学会特別賞受賞、第 17 回国際開発大来賞受賞、日本手話学会前会長、『手話学研究』編集委員会長
著書：森壮也・山形辰史『障害と開発の実証分析ー社会モデルの観点から』勁草書房（国際開発大来賞受賞）
訳書：『「ろう文化の内側」から』（明石書店）他

若林　亮　（弁護士）
1976 年生まれ、生まれつきろう者。1994 年早稲田大学政治経済学部政治学科入学、1998 年読売新聞東京本社入社、2008 年上智大学法科大学院入学、2011 年同校卒業、司法試験合格、2012 年司法修習終了、2013 年 1 月 1 日より法テラス東京法律事務所勤務、現在にいたる。日弁連の差別禁止特別部会にも所属。

袖山　由美（アメリカ手話通訳、国際手話通訳、キッズイングリッシュ教室）ギャローデット大学（学士）、サンフランシスコ州立大（修士）著書：『ろうのゆんみがＵＳＡでサランヘヨ』『ろうのゆんみがピーター・ウーマン浦島花子になる』『心の鏡』（以上すべて新風社）、『私は心を伝える犬』（ハート出版）、漫画『サミーに優しい台湾』『天使からの贈り物』。東映教育映画「みみをすます」「あたたかい心ありがとう」主演。聴導犬と暮らす。

雫境　（舞踏家、雫・主宰）
2000 年東京藝術大学大学院博士課程修了、美術博士号取得。大学院在籍中、「舞踏工房 若衆」主宰・鶴山欣也の誘いを受け、舞踏を始める。国内、スペイン、ペルー、ノルウェー、韓国などの海外で公演、ワークショップを行う。2013 年アニエス b.初監督映画 *Je m' appelle Hmmm*…（邦題：『私の名前は…』）に出演。

角　祐樹　（日本手話講師）
情報システム工学を専攻。
大手情報システム会社勤務の経験をもち、現在は手話教師・手話通訳者養成に携わる。ろう手話通訳者としても活躍。

佐野　正信　（翻訳家）
明治大学大学院卒。O・サックス『手話の世界へ』（晶文社）で毎日出版文化賞受賞。他の訳書にK・ストロング『田中正造伝』（晶文社）、N・E・グロース『みんなが手話で話した島』（築地書館）などがある。D・ハーマン *Helen Keller — A Life* の邦訳を明石書店より刊行の予定。

末森　明夫　（産業技術総合研究所バイオメディカル研究部門ｘ主任研究員）
東京大学大学院卒、農学博士、（1996 年ロンドン大学 Kings College London 留学）博士論文題目：*Rhodococcus erythropolis* S1 株による芳香族化合物の分解
現在の研究課題：「準加算性適応歩行法による蛋白質の改変」

中野　聡子　（大大阪大学キャンパスライフ健康支援センター　講師）
筑波大学大学院卒（'96-97 ギャローデット大学留学）。博士（心身障害学）。大阪大学では身体障害学生支援のコーディネートを総括・担当している。
近年は高等教育やろう者の研究活動において必要となる学術手話通訳者の養成に取り組んでいる。

高山　亨太　（ギャローデット大学ソーシャルワーク学部専任教員、精神保健福祉士・社会福祉士）
筑波大学大学院、ギャローデット大学大学院修了。日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会元事務局長、手話で語る心理臨床研究会幹事、障害学会理事。ろう者の精神保健に関する研究やスクールソーシャルワーカーの養成に取り組んでいる。

森　亜美（英語・アメリカ手話教師）
早稲田大学第一文学部史学科西洋史学専修卒。ニューヨーク州ロチェスター大学で社会言語学聴講。
訳書にキャロル・パッデン、トム・ハンフリーズ「ろう文化案内」（晶文社）、「ろう文化の内側から」（明石書店）（森壮也と共訳）がある。
現在筑波技術大学、日本社会事業大学アメリカ手話の非常勤講師。東京都聴力障害者情報文化センター英語教室講師。

「手話による教養大学」特別聴講生一覧

	区分	学生番号	1 初級日本手話F（角）	2 初級アメリカ手話B（袖山）	3 上級アメリカ手話（袖山）	4 人間XⅣ（佐野）	5 人間XⅤ（挙境）	6 人間XⅦ（中野）	7 人間XⅧ（森壮）	8 科学XⅠ（末森）	9 法学B（若林）	10 社会福祉特講Ⅱ（高山）	11 英語A23（森亜）	12 社会調査法ⅠB（森壮）	13 英語A24（佐野）	14 中級アメリカ手話（袖山）	人間XⅥ（挙境）※今年度休	15 社会福祉特講Ⅴ（高山）	16 人間XⅨ（前田・福島）	17 初級アメリカ手話A（森亜）	18 科学XⅢ（木下）	19 科学XⅣ（木下）	20 社会XⅤ（吉川）	計
			文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	文	清	清	清	清	清	
			前	前	前	前	前	前	前	前	前	前	前	後	後	後	後	後	前	前	後	後	後	
1	一般	18200001		1				1								1								3
2	一般	18200002		1																				1
3	一般	18200003				1																		1
キャンセル	一般	18200004																						0
キャンセル	一般	18200005																						0
4	一般	18200006							1	1														2
5	一般	18200007										1												1
6	一般	18200008							1			1		1										3
7	一般	18200009											1											1
8	他大	18205001							1															1
9	他大	18205002			1										1									2
10	他大	18205003			1																			1
11	他大	18205004		1												1								2
12	他大	18205005			1																			1
13	他大	18205006			1																			1
14	他大	18205007		1											1	1								3
15	他大	18205008		1												1								2
16	他大	18205009			1																			1
17	他大	18205010		1												1								2
18	他大	18205011										1												1
19	他大	18205012			1								1											2
20	他大	18205013		1												1								2
21	他大	18205014			1										1									2
22	他大	18205015			1																			1
23	他大	18205016			1																			1
24	他大	18205017			1																			1
25	他大	18205018				1																		1
26	他大	18205019				1																		1
27	他大	18205020						1							1	1								3
28	他大	18205021													1									1
29	他大	18205022																1						1
30	他大	18205023																1						1
31	他大	18205024																1						1
キャンセル	一般	18200010																						0
32	他大	18205025																1						1
33	他大	18205026																1						1
34	他大	18205027																1						1
35	他大	18205028																1						1
36	他大	18205029																1						1
37	他大	18205030																1						1
38	他大	18205031																1						1
39	他大	18205032																1						1
40	他大	18205033																1						1
41	他大	18205034																1						1
42	他大	18205035																1						1
聴講生および特別聴講生			0	7	10	3	0	2	3	1	0	3	2	1	5	7	0	14	0	0	0	0	0	58
本学在学生			4	2	1	0	1	1	0	4	4	1	8	1	9	0	0	3	7	3	32	32	15	128

ISSN 0916－765X

日本社会事業大学

研　究　紀　要

第 67 集

2021年 3月

2020年度　日本社会事業大学
研究紀要　第67集 抜刷

日本財団
「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」
10年の歩み

斉　藤　くるみ

日本財団「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」10年の歩み

斉　藤　くるみ

Ten Years of the Support Project for College Students with Hearing Impairment

Kurumi Saito

Abstract: The author had proceeded the Support Project for Students with Hearing Impairment from 2010 to 2019 subsidized by the Nippon Foundation. This is the report of the project; general/liberal education classes in Japanese Sign Language by Deaf professors and giving credits to JCSW students and other students as well by credit transfer system; Access services in all classes and seminars taken by hearing impaired students; Support for hearing impaired high school students intending to go to college. This project had protected the human rights of Deaf and hard of hearing. It was completed and taken over to the new project called "Educating Internationally Aware Deaf Peer Social Worker." This is the report of ten years of the project and its achievement related to the new project.
Key Words: hearing impaired, Deaf, language rights, access service

要旨：本レポートは日本財団「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」に１０年間携わってきた中で、それが聴覚障害者の権利、日本手話の言語権をどう守って来たかということを総括したものである。学内での聴覚障害をもつ学生の情報保障、学内外の日本手話話者のための「手話による教養大学」、そしてろう・難聴高校生のための大学受験支援が様々なプログラムに派生したことも示す。このプロジェクトの中の柱のひとつ、「手話による教養大学」が、日本財団新プロジェクト「国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成」につながった理論的根拠も述べている。
キーワード：聴覚障害、ろう、言語権、情報保障

はじめに

日本財団「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」は10年に渡って、本学の聴覚障害学生の情報保障を行い、関東の高校生・大学生・社会人に手話による教育を提供してきた。(厳密に言えば2009年度下半期からの10年半である。) その意義はろう・難聴の人たちが高等教育を受ける権利を守り、ろう者の言語である「日本手話」の権利を守り、その重要性を社会に発信してきたことにあった。

成果として、聴覚障害者が大学で学ぶために必要な情報保障のモデルを構築し、日本社会事業大学の聴覚障害をもつ学部生・大学院生・通信科学生、約30名ほどをソーシャルワーカーとして輩出したこと、また毎年のべ30～40名の受講生にろう者の講師の手話による教養教育を提供したこと、ろう・難聴の高校生たちの受験指導を毎年行い、多い年には10名、大学に送ったことが挙げられる。

本報告書ではその10年間の歩みを記録するとともに、新プロジェクト「国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカー養成」への発展について述べる。特に医学モデルから社会モデル、そしてさらに進んだ文化言語モデルとしての「手話による教養大学」の理念と意義を明確にし、それを進化させる新プロジェクトへの期待を述べる。

1. 情報保障

大学の授業に障害者のための情報保障をつけることは大学の義務である。しかし、10年前、聴覚障害をもつ学生の授業に情報保障を必ずつけている大学はなかった。日本社会事業大学は日本財団プロジェクトが始まる前から教員と学生がタイアップしてなるべくすべての授業に学生のボランティア（有償ボランティアを含む）によるパソコンテイク、少なくともノートテイクをつけていた。そして2010年から、日本財団の支援により、すべての授業にそれぞれの学生の言語状況に応じた情報保障をつけることができるようになった。聴覚障害をもつ学生が履修する授業すべてに、パソコンテイクによる文字情報保障、または手話通訳による情報保障を適宜提供してきた。プロの手話通訳者、パソコンテイカーが中心であったが、学生のパソコンテイカーも養成してきた。これには予算削減、アルバイトをしたい学生への支援、福祉を目指す学生の教育などのメリットがあり、持続可能な情報保障モデルの要素でもある。

この理想的な情報保障のモデルは、他大学にも影響を与えた。しかし、今でもすべての授業に情報保障が自動的に提供されるという大学は非常に少ない。2013年のいわゆる障害者差別解消法以来、全国の大学で情報保障をつけなければ、という意識は高まったが、大学での情報保障は努力義務でしかないし、「合理的配慮」はいかようにも解釈できるため、多額の費用がかかる情報保障はなかなか進まない。ただ差別解消法により、聴覚障害をもつ学生が、情報保障を要求すれば「建設的対話」をしなければならなくなったため、少しずつ改善されていく可能性はある。

本学は日本財団の支援を受ける中で、2020年度以降は大学として、このプロジェクトを継

続するという覚書を交わして、2019年度まで支援してもらった。今年度(2020年)は日本財団の助成金ではなく、大学として情報保障をつけている。勿論かけられる費用は大幅に減少するが、前述のように節約できるように準備をしてきたので、プロのスタッフへの依頼を相当カットできる。プロの方がスキルが高いところもあるが、大学の場合、内容が専門的なので、その授業を履修した学生の方が有利な面もある。

当然約束通り、情報保障の予算は確保されているのであるが、新型コロナのせいで、前期はほとんど開講されず、文字による教育が中心になったため情報保障の費用がおさえられてしまった。しかし新型コロナ感染が解決した後、2019年並みの予算を確保することは必須である。

2．ろう・難聴高校生の進学塾

情報保障のモデルを作ろうにも、本学にろうの学生が集まらなければ何もできない。当初は聴覚障害の学生は、一学年にひとり、いるか、いないかというところだった。大学に進学する高校生というのは非常に少ないことにあらためて驚いた。一般の高校生の５割以上が大学に進学するのに、ろう学校からの進学率は２割にとどまっていた。全国のろう学校の受験指導というものも皆無に等しい状況であることがわかった。

そこで進学支援をすることにした。後述する「日本手話によるろう者の大学ことはじめ」を開催したときに。「ろう者の高校ことはじめ」というのもやってみたことがあった。ろう学校の生徒やインテグレーションの生徒がどこからともなく集まってくれたのでニーズがあることはわかっていた。日本財団の担当の石井靖乃氏に相談し、プロジェクトの中に高校生支援も入れさせてもらうことになった。この石井氏は聴覚障害に大変詳しく、『手話による教養大学の挑戦～ろう者が教え、ろう者が学ぶ』（筆者編。2017年ミネルヴァ書房より出版。）でアジアのろう教育の現状について一章執筆してもらった。

日本財団プロジェクトの中で「大学へ行こう～手話と情報保障で目指す大学受験」と題して塾を始めたところ、ろう学校では大学受験を強く反対されることがあるということを知った。塾に通い始めてあっという間に模擬試験の点数が上がったのに、学校の先生が受験はさせないと言っていると号泣する生徒もいた。ろう学校の中には、浪人することを恐れ、障害者枠で就職させるキャリア教育に重点を置いているところが多かった。結局塾に通ってきた高校生たちは、一部の途中でやめて連絡がとれなくなった生徒を除いて、すべて大学に進学している。ＡＯ入試や推薦入試など大学入試が多様化する中、本当に大学に行きたいと思えば、様々な選択肢があるのである。

しかし、残念なことに面接試験に通訳を入れることを認めない大学も未だにある。ＡＯ入試でプレゼンテーションが課せられる時、手話通訳が、受験生に有利になるように、サポートしてしまうのではないかという危惧から、通訳を入れることを認めない大学もある。実は日本社会事業大学でも、入試の面接に手話通訳を入れるとき、そのような懸念を口にする教員はいた。しかし手話通訳者の倫理というものがあり、その懸念は専門職に対して失礼である。また大学側が通訳を手配すればよいし、信用できないならば録画をし、あとで検証すればよい、ということを主張して、理解された。

10年のプロジェクトが終了するにあたり、ろう・難聴高校生の塾は、日本社会事業大学から切り離され、NPO法人「ろう・難聴中高生学習支援の会」で運営されることになったが、その移行の準備のさなか、新型コロナの流行により、塾が開催できなくなり、オンライン化した。いち早く（2020年2月から）オンライン化したために、ＮＨＫにて報道された。

ろう者というマイノリティーの支援活動の難しさは、数にして多くの人が集まらないので効率が悪いといわれることである。特に講義を「聴く」場である大学においては、聴覚障碍者はこんなに費用がかかるのか、と言われ、当事者も支援者も肩身の狭い思いをする。しかしオンラインを利用すれば相当数の受講生が集まる。ただ受講生の多くは、学校は楽しくなかったり、行きたくなくても、同じ音のない世界に生きる友達と会うために通って来ていた子どもも多かったので、その子たちの中には通学できるようになるまで待つ、と言って、オンライン授業には参加しない子どももいる。また手話がZoomなどの画面に入りきらないことがある。画像がしっかり送受信できないと、ストレスが大きいことも課題である。いずれもテクニック向上によりある程度改善できる。

資金の問題は深刻である。NPOは日本財団に引き続き支援してもらっているが、自己負担金20%の捻出に苦労している。受講生から20%取ればよいという考え方もあるが、授業にはろうの講師だけをそろえることはできないし、現状では手話を見ずに育った高校生がたくさんいるので、予備校の先生に授業をしてもらい、オンライン上で支援者（パソコンテイカー）とつないで文字も見せることになる。そのような方法では一時間の講師への謝金とパソコンテイカーの謝金で15000円以上かかる。受講生はひとつのクラスにせいぜい二名か三名である。元々裕福な家庭のろう児は、親がパソコンを２台つないで、勉強を教えたり、有名大学の大学生に家庭教師をさせたり、高額の費用を出して勉強をさせている。そのような子どもたちは恵まれていて、昔からごくわずかな大学進学を果たす聴覚障害者であった。

社会貢献としては、恵まれない高校生こそ対象にすべきと考える。これまで、無料であるから通ってきていたのであり、もしも有料にしてしまったら、大学に行ってもついていけやしないのだから、受験などという夢を見るのではなく、障害者枠で就職しなさい、ということになってしまいかねないのである。NPOは自治体からの助成をもらったりしているが、20%の自己負担にはならない。今後財源を安定させることは最も大きな課題である。

３．学校に行けない高校生の支援―「高卒認定試験対策プロジェクト」

マジョリティー言語を強いられる中で学校に行けなくなるろう・難聴児は多い。インテグレーションの場合、ほとんどの聞こえない高校生がいじめに合った経験をもつ。「へんなしゃべり方」だと必ず言われるし、人工内耳の子どもは「頭にへんなものをつけている」「フランケンシュタインだ」などとからかわれることもある。

ろう・難聴の高校生の塾で大学受験のための支援をする中で、学校に行けなくなる高校生が多いことを知った。中には学校に行けなくなっているのに、塾にはわざわざ制服をきて、他校の生徒に引きこもりがバレないようにして通ってきた子もいる。全国には学校にいけなくなっている高校生がたくさんいるだろうと想像できた。そこでインターネットで動画を配信し、高

卒認定試験を受けて大学を目指すよう支援することにした。文科省に許可を得て、過去問の解説を手話で行った。

日本社会事業大学の学生が、過去問を研究し、また専門の先生たち（本学の教員を含む）の力を借りて、解説の原稿を作成し、ろうの学生が手話で解説する動画を撮影した。そして全国どこからでも見られるようにＨＰにアップした。

この活動はＮＨＫの「ろうを生きる・難聴を生きる」に「一緒に“学ぶ”楽しさをもう一度！」というタイトルで取り上げられた。

(https://www.nhk.or.jp/heart-net/program/rounan/955/)。

このときに、本学で元気いっぱい学んでいる学生たちの多くが、実は中・高校生のとき不登校になった経験を持っているということがわかった。中には名前も顔も出して、全国放送の番組に出演して、そのときのことを話してくれた学生もいた。

この動画は今もアップされているが高卒認定試験にふみきる親は少なく、何とか手堅く高校を卒業させようとする。そのうち心を病んで自力で勉強できる状態ではなくなるという例もある。高卒認定試験に関係なく基礎学力につながるので、動画を利用してもらいたいと思っており、広報を続けていきたい。

４．日本手話の入試への導入

プロジェクトの大きな飛躍は2014年の本学入試への「日本手話」の導入であった。これは必ずしも法人や文科省に簡単に理解が得られたわけではなかったが、学内の教員たちの応援や、手話による教養大学のスタッフの尽力が大きかった。

ろうの高校生にとって、入試はすべて外国語である日本語で行われるのである。「国語」という科目も彼らにとっては外国語のようなものである。その上英語の修得となると大変なハンディキャップがある。英語は「音声」言語であり、耳にしたこともない26文字のアルファベットの羅列をひたすら暗記しなければならない。本学では聴覚障害の受験生について外国語の点数を、半分は英語、半分は「日本手話」という設定にしてある。厳密に言えば、国語を「日本手話」に置き換え、「国語」を外国語科目とみなすべきかもしれないが、ろう児も書記日本語は母語とすべきという建前がある。また英語も、少なくとも読み書きは国際語として必要である。しかし、英語の口話（こうわ：読唇と発話）は不可能であるが、実際には日本の教育機関はそれをやらせてきている。そのためほとんどのろう児が英語という言語をマスターするには至らない。この点についてはろう児仕様の読み書き能力を習得させる英語教育が必要である。筆者も「手話による教養大学」の講師も、少しずつではあるが、ろう者仕様の英語教育の開発を取り組んでいる。

入試への「日本手話」の導入は、入試での言語的ハンディキャップを埋める手段でもあったが、何よりアメリカ並みに、ろう者の手話をマイノリティー言語として尊重する姿勢を示すものであることが大きかった。アメリカでは2009年の調査で、アメリカ手話が大学での外国語科目として、イタリア語、中国語をぬいて４番目に人気のある外国語となった。（１位はスペイン語、２位はフランス語、３位はドイツ語。）これに比べて、日本では日本手話の認知度はあまりに

も低い。

「日本手話」を教育言語とし、かつ「国語」のように教科として教えているのは、学校法人明晴学園だけである。これでは、認知度も上がらないし、障害者権利条約でいう「手話の習得及び聾社会の言語的な同一性の促進を容易にする」ことはまだまだ実現しているとは言い難い。

日本語対応手話と呼ばれるものが「手話」ではなく「手指日本語」なのであるということは、日本学術会議も、2017年「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」で以下のように述べている。

> 日本語を話しながら手話単語を並べる手指日本語は、音声言語としての日本語を手と指で表現したものであって、語順や文法は音声日本語に依拠している。その点で、手指日本語は「音声日本語」の一種であって、「手話言語」ではない。音声日本語を母語として獲得した後に聴覚障害となった中途失聴者や、手話を母語とせずに口話法（音声言語の発声を訓練し、音声言語によって意思交換を行う方法）により音声日本語を身に付けた人が手指日本語を日常的に用いることが多く、テレビ放送で使われるのも多くは手指日本語である。このように、手指日本語は手話言語とは呼べないものであるが、「日本語対応手話」という名称で呼ばれているため、一般には「手話」の一種と思われている。本提言では、このような誤解を避けるために、手指日本語（日本語対応手話）を手話言語に含めず、「日本手話」のみを指して「手話言語」と呼ぶ（日本学術会議 2017)。

言語学的には明らかであるのに、「日本手話」の権利を守ろうとすると、「日本語対応手話の子もいるのに」という反対が必ず出て来る。「日本語対応手話の子もいる」のは聞こえる人間が音声を強制しているからであり、ろう児たちが自然に日本語を獲得することはあり得ないのである。ろう児が、音声や、あたかも音声を使っているかのような口形を必要とする日本語対応手話を完全な言語として自然に習得することはあり得ない。日本語を母語とする人が、音がないために日本語を自然に習得することが不可能なろう児に、なんとか<u>日本語に近い物</u>を習得させようとするのが日本語対応手話なのである。仮に日本語対応手話のみしか見られらない環境で、ろうの赤ちゃんを育てたとしても、ろうの赤ちゃんが複数いれば、その赤ちゃんたちは、見たことのない日本手話の性質をもった手話を自ら生み出すのである。そのことはアメリカ手話と手指英語との関係で結果が出ているし、また親が日本語対応手話しかできない聴者であっても、子どもは日本手話を少し見さえすれば、日本手話のほうを獲得することで証明されている。明晴学園はまさにその能力に基づいて教育を行っているのである。

日本手話の入試は、日本手話を母語とする人たちの日本手話表現を見て、質問に答えるもので、音声言語でいうと「リスニング」のテストに似ている。紙に書ける言語ではないので、試験が公正に行われる環境が必要である。また出題ができる人もマイノリティーであることは否めない。その意味でなかなか波及することは難しいのであるが、センター入試の英語のリスニングも、2006年までは環境の公正性などの点で反対が強く、実現しなかったが、聞くこと、話すことがなければ音声英語を習得したことにはならないという考え方になって、リスニング

テストは実現できるようになった。

ＣＥＦＲ(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment) の測定基準に手話も明記されている。高等教育の中で日本手話の能力を測定し、評価することが当然であることを一層示していかなければならない。

5．日本手話による教養教育の始まり
――手話による教養大学の前身「日本手話によるろう者の大学ことはじめ」

ろう者は常に外国語たる日本語、またはせいぜい手指日本語（日本語対応手話）でしか学習することができなかった人がほとんどである。ろう者に母語で大学レベルの授業を受けてもらいたい、ろう者が満足するような教養教育を提供したい、という思いから、2008年７月、東京周辺のろう者を対象に、「日本手話によるろう者の大学ことはじめ」と題したチェーンレクチャーを行った。受講生募集は、口コミであっというまに定員(40人)に達し、毎週金曜日の夜、様々なテーマのろう者の講義と、ろう者の受講生たちの質問、そして熱い議論が繰り広げられた。2008年７月２日、毎日新聞に「熱帯びた『日本手話』での講義―母語で学べぬ痛み共感」というタイトルで報道された（蒔田備憲記者)。その中には

> 日本語と文法が異なる日本手話を主な母語とする「ろう者」の講師陣が、日本手話だけでろう者に大学レベルの講義をする初の市民講座が５月、日本社会事業大文京キャンパス(東京都文京区）で始まった。これまで日本手話で学べる場がなかった受講者たちの目は、真剣さと喜びで熱を帯びていた。・・・受講者は食い入るように講師を見つめる。無音の講義は約２時間。手を打ち合わせる手話の動作の音だけが静寂を破った。私はほとんど理解できず、外国に１人、放り出されたような気分だった。・・・・私はいくつかの日本語対応手話を知っているが講義に全くついていけなかった。

と書かれていた。そして受講生の一人のインタビューとともに以下のように締めくくられている。

> 「人生で初めて自分の力だけで受講し、最後まで理解できた」と興奮を隠さなかった仁木さん。私には、日本語で学ぶことは当たり前だった。音のしない講義室で、内容が理解できない孤独感から席を立ちたい気持ちにかられた時、母語による教育の機会を奪われたろう者の想いに気付いた。少しだけ想像してみてほしい。理解できない言葉による授業を強いられる自分を。ろう者の望みはそれほど大それたことだろうか。

講師は当初、経済学者の森壮也、弁護士の田門浩、構造生物化学を専門とする博士の末森明夫、翻訳家佐野正信、画家の八木道夫、舞踏ダンサーで博士の雫境らであった。毎週通って来るろうの社会人たちの熱気にろう者たちがいかに母語で学べる場所を待ち望んでいたかがよくわかった。

1990年森壮也氏との出会い以来、マジョリティーにあまり知られていないだけで、ろうコミュニティーに非常に才能のある研究者や芸術家がいることに感銘を受けていたので、この一連の講義を開催したのであったが、すぐに定員に達して締め切ってしまったのが残念で、同年(2008年)、11月と12月に「ろう者学」というタイトルの第2シリーズを提供した。ここではろう史、ろう教育を研究している講師を集めた。また清瀬キャンパスに日本ろう者劇団を招き、大学を囲む地域に提供した。近くの団地に住む家族などが鑑賞した。

この「日本手話によるろう者の大学ことはじめ」の成功と、それまで学生の授業に、当時としては先駆的なパソコンテイクをつけて情報保障などを行ってきた実績、また本学が日本手話を語学の単位として認めていたこと、その日本手話を中心に据えた特別支援教職課程を持っていたことなどにより、日本財団から助成事業への誘いがあった。これも森壮也氏が日本財団に私を推薦してくれたおかげであった。当時本学は日本手話を外国語として認め、それを必修とした教職課程をもった日本で唯一の大学であった。

このような背景から手話による教養大学が生まれたのである。

6.「手話による教養大学」の意義

「手話による教養大学」は、日本で唯一、すべての授業がろう者の講師によって提供されるもので、学生もろう者または手話者（CODAや手話通訳のように手話に堪能な人）である。日本の大学は、ろう学生のためにノートテイカー、パソコンテイカー、または手話通訳を提供するところが増えてはいるが、ろう学生の教育言語として日本手話を採用しておらず、ろう学生の言語権として日本手話を認めていない。「手話による教養大学」は危機言語と言っても過言ではない少数言語「日本手話」を母語とする学生の言語権を守るため、10年間、日本手話で大学の正規の単位になる講義を提供してきた。

開設時は言語学者、経済学者、弁護士、翻訳家、舞踏家、生物学者、心理学者、アメリカ手話教師が講師であった。いずれも日本社会事業大学社会福祉学部の教授会で議決された、正規の科目担当者の資格をもつ人たちである。2017年6月には彼らの執筆を集め『手話による教養大学の挑戦』を出版した（斉藤編2017)。各章はそれぞれの専門性に基づいて異なる視点から日本手話によるこのプログラムの意義が書かれている。

日本手話が理論上危機言語と言える状況になっている原因として、(1) 手話というものが「言語」として認識されにくいこと、(2) ろう学校では、音声をつけながらの「日本語対応手話」の使用が半ば強制されていること、そして (3) 聴覚障害者の両親の90%が聴者であり、彼らは補聴器または人工内耳を選択する傾向があることが挙げられる。

ただ、危機言語の定義に必ずしもあてはまらないのは、音声言語のように、マジョリティー言語が聞こえてしまうため、子どもたちがいつの間にかマジョリティー言語を母語としてしまうということが、ろう者にはあてはまらない、という点である。つまりマジョリティーに飲み込まれてしまいにくいのである。

もちろん楽観はできないし、ろう当事者の危機感は非常に強い。大多数の日本語話者は、日本手話と日本語対応手話の区別がつかないので、訴えても訴えても日本手話を尊重してくれな

いし、日本手話に関心を持って、習得しようとするおとなの聴者は、すでに日本語を母語としているため、日本手話を学ぼうとしても日本語対応手話になってしまう。日本語対応手話は単語だけは日本手話から借りているので、日本語を母語としている人が日本手話を学んでも日本語対応手話に近くなってしまうのである。

2014年、日本は国連「障害者の権利に関する条約」に批准した。批准に先立ち、日本政府は障害者基本法を改正した。この両者とも手話を正当な「言語」として認識しており、前者は障害者の文化的アイデンティティを尊重すべきことも明記している。しかし、日本社会、特に教育現場において、ろう文化のアイデンティティは認めておらず、むしろ音声日本語をつけた日本語対応手話を教育言語とすることで、ろう者のもっとも誇りとする日本手話を使えなくしているのである。音声日本語を発しながら日本手話も手で話すことは、日本語を話しながら同時に英語を書くのと同じで不可能だからである。声で日本語を発することを強いられれば、日本手話を母語とする人でも日本語対応手話に近くならざるを得ない。彼らは日本手話話者同士のときだけ日本手話で話すことができるのである。親もろう者のため、家に帰れば日本手話で話せるろう児はよいけれども、ほとんどのろう児は家に帰っても家族は日本語（日本語対応手話を含む）である。このような日本社会では、「手話による教養大学」はまさに挑戦であり、ろう者が教え、ろう者が学ぶ環境がなければ実現できなかった。このプログラムが成功したのは、多様なメンバーのおかげである。多くは森壮也氏の推薦による。現日本手話学会会長末森明夫（構造生物化学・ろう史研究）、副会長斉藤くるみ（筆者・言語学）、元日本手話学会会長である森壮也（経済学・手話言語学）等、日本の手話言語学の学界に影響を与えている人材が入っている。また、このチームはリベラルアーツというコンセプトのため、さまざまな分野の専門家で構成されていることも幸運であった。手話言語学者（森）は、日本手話が自然言語であることを科学的に証明することができ、神経言語学者（斎藤）は、ろう者の手話は人間の脳のブローカ野とウェルニッケ野で生成され解釈されるが、ジェスチャーはそうではないことを示すことができるし、弁護士（田門浩）は、聴覚障害者の人権と手話の法的承認について周知している。構造生物化学の専門家（末森明夫）は、彼の分野の理論を手話の派生構造等に応用して理論化して見せた。心理学者（中野聡子）は、手話が聴覚障害児の発達を促進すること、日本手話の話者であろうと日本語対応手話のユーザーであろうと、大学の講義は日本語対応手話よりも日本手話で行う方が、よく理解できるという証拠を提供することができた。また精神保健福祉士・社会福祉士で米国ギャローデット大学講師（高山亨太）は、ろう者を助けるために、手話者（特にろう者）がいかに重要な人材かを示した。

絶滅の危機に直面している日本手話は、他国のろう者の手話と同様、障害者権利条約の施行によって存続する可能性が高まった。しかし、アイヌ語が長い間絶滅の危機に瀕していることからも明らかなように、多くの日本人は言語権に敏感ではないため、楽観的ではいられない。聴覚障害児の教育者や保護者は、子どもたちに声で話せるようになってほしいと望む傾向が強い。

幸いなことに、このプロジェクトは、日本で最も長い歴史を持つソーシャルワークの大学である日本社会事業大学で設立された。厚生労働省から資金提供を受けているという点でもユ

ニークである。代表者斉藤がたまたま日本社会事業大学の教員であり、福祉界ではろう文化を支持するソーシャルワークのアプローチが受け入れられやすくなったため、チームの理想は実現したと言える。つまり福祉界では障害のとらえ方が医学モデルから社会モデルへ、さらには文化言語モデルへと変遷しているからである。

障害者権利条約（2014）を批准するために、日本政府は障害者基本法（2011）を改訂した。条約の背景には、2001年にICF（国際生活機能分類）の承認があった。その理念は、障害は障害者の身体的および精神的要因によってではなく、社会の環境要因によってつくられるというものである。これは社会モデルと呼ばれる。たとえば聞こえない人の生きづらさ、不便さは、その人が聞こえないせいではなく、多くの聞こえる人のために社会ができてしまっているからだと考えるのである。もしも皆が手話で話しているろうコミュニティーの中に手話を知らない聞こえる人が入ったら、聞こえる人のほうが孤立し、不便な思いをする。つまり障害を抱えるわけである。社会モデルによれば、聞こえる人のための環境の中に聞こえない人が入るときには、手話通訳者をつける、ＰＣテイカーをつける、あるいは聞こえる人が文字で書いて筆談をする、というような配慮をすれば障害は存在しなくなるのである。

一方、障害を持つ人のせいなのだ、障害をなるべく「治せ」ばよいのだという考えを医学モデルという。聴覚障害者の場合、医学モデルは人工内耳または補聴器により、治療し、あるいは聴力を補おうするのであるが、このモデルが、障害者への偏見を助長することは、LGBTなどで顕著にあらわれている。過去にはなんとか治そうとしたが、今ではセラピーなどで治そうとしてはいけないという法律ができている国もある。例えばドイツの連邦議会は2020年５月、性的指向を変える「転向療法」を18歳未満の若者に提供することを禁止する法案を可決し、これに違反すると罰金が科せられることになった。LGBTは障害とは見なさなくなっているが、望んで手術などする人もいることを考えると、障害という定義自体が必要なのかどうかと疑わざるを得ない。ろうを文化とするならば、人工内耳も18歳以下に施してはいけないことにならないだろうか。ここで問題なのは人工内耳は６歳以下（できれば３歳以下）で手術しないと効果が非常に低いということがあるのである。もし聞こえる人に変えようとするならばろう児に判断能力がないぐらいの年齢で手術に踏み切らなければならないのである。

障害者権利条約はICFよりさらに踏み込んで、障害を文化として肯定的に捉えるようになっている。第８条の２（a）(ii)(iii)には、

（ⅱ）　障害者に対する肯定的認識及び一層の社会の啓発を促進すること。
（ⅲ）　障害者の技能、長所及び能力並びに職場及び労働市場に対する障害者の貢献についての認識を促進すること。

とあり、第24条(a)では、

(a) 人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること。

と、障害を多様性としてとらえ、続く3（b）には

(b) 手話の習得及び聾社会の言語的な同一性の促進を容易にすること。

と、ろうを手話をもつ文化集団として守ることを謳っている。さらに第30条では

第30条4　障害者は、他の者との平等を基礎として、その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及びろう文化を含む。）の承認及び支持を受ける権利を有する。

と明記している。

この文化言語モデルにより、彼らは自国の手話（日本では日本手話、米国ではアメリカ手話）で生活することができ、手話で会話したり、手話で学んだりする権利を保障されることになる。このモデルでは、ろう者が文化的グループとして認識され、ろう児に手話を習得させ、ろう文化を子どもたちに伝えることができる。

障害者基本法が改正されたとき、この法律は手話を初めて「言語」として認識したため、ろうコミュニティーでは大きな喜びとなった。しかし、日本社会は依然として医療モデルが優位であるし、マジョリティーの意識はなかなか変わらない。

本プロジェクトは、2009年当初から社会モデルと文化言語モデルに基づいていた。授業にパソコンテイクをつける情報保障は社会モデルである。一方、手話通訳をつけるのはろう者の手話を尊重しているという意味で文化言語モデルである。さらにろう者が自分の母語で教育を受ける権利を守り、教える方も、習う方もろうコミュニティーの中の人材による「手話による教養大学」は、上記「手話の習得及びろう社会の言語的な同一性の促進を容易」にすることであり、「その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及びろう文化を含む。）の承認及び支持」を具現するものでもある。

7．手話による教養教育から国際教育へ

2020年から日本財団新プロジェクト「国際的視野をもった当事者ソーシャルワーカーの養成」が始まった。これは2010年から2019年までのプロジェクトの中の手話による教養大学の理念を、国際性と結び付けたものである。教養教育と国際教育はオーバーラップするところが多い。国際性の高さは、英語力のみでないことは言うまでもない。高い国際性をもつには教養は必須である。

本プロジェクトの「手話による教養大学」は当初から、日本の、さらにはアジアの、ギャローデット大学を目指そうということであった。ギャローデット大学はろう者のための人文・社会学系の総合大学であり、アメリカ手話を教育言語とし、教員も皆アメリカ手話話者（多くはろう者）である。手話による教養大学と理念は同じである。2018年筆者はギャローデット大学を訪れ、国際部長のチャールズ・レイリーと協働教育の可能性を話し合った。日本社会事業大

学は社会福祉の単科大学であるが、一方で「手話による教養大学」は、リベラルアーツのプログラムである。そこでギャローデット大学もソーシャルワーク学科を拠点として、教養教育プログラムを協働作成することになった。

COILという方法を使って手話による教養大学の講師とギャローデット大学のろう者学・ソーシャルワーク・歴史学などの講師が授業のコンテンツを持ち寄り、ソーシャルワークを志向したろう者学の協働授業を行うことになった。COILとはCollaborative Online International Learning の略で、ICTを用いて、バーチャルに国境を越えて、学生たちが交流学習を行う活動である。本年度に入り、米国ギャローデット大学と日本社会事業大学の教授陣が、COILの発案者であるニューヨーク州立大学COILセンターの所長Jon Rubin氏をゲストに迎え、オンライン会議を進め、この教授法を学んだ。双方のろうの教授陣によるオンデマンド動画や執筆教材を準備したが、COILの特徴として時差があっても、様々なSNSを利用して、学生同士（4～5人のグループに分かれ）が情報提供し合ったり、学びを深めたりする部分が肝なのである。学生の履修定員は20人までとし、5人のグループを4つ作ることになった。夏から秋にコンテンツをバイリンガル仕様にした。動画に翻訳ワイプ（小窓）をつけたり、字幕をつけた。10月末からgoogle classroomを設置し、予習をさせ、11月12月の8週間、SNSを駆使したラーニング・アクティビティが行われる。

またろうの学生一名がギャローデット大学に留学している。その学生はデフファミリー（家族皆がろう者）であり、みごとな日本手話を話す。英語の準備で苦戦し、新型コロナで渡航できず、昼夜逆転のオンライン受講をしていたが、10月初め、無事渡米した。学生寮も閉鎖のため、アメリカ人の先生の自宅に置いてもらっている。

おわりに

このように「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」は数々の先駆的な事業を行い、それを持続可能な形にし、今なお継続している。一方、プロジェクトの中の「手話による教養大学」は、単に聴覚障害者が大学の教育に参加する権利を守るだけでなく、危機言語たるろう者の「日本手話」を守ってきた。そして国際的な新プログラムに進化した。

アメリカ手話に対する誇りの高いギャローデット大学との連携で、日本のろう学生も自分たちの言語の権利を主張できるだけの誇りをもってほしい。抑圧と差別はアメリカでもないわけではないが、そのような聴覚障害者に対しては、「ろうを回復する」という意味の「デフゲイン」という概念が確立している。まさに日本社会事業大学の学生には「デフゲイン」をしてほしい。

多くの日本手話話者は日本手話の権利を主張することに罪悪感をもってしまう。ろう学校では声でしゃべる難聴の子どもが優等生とされる。声でしゃべれないデフファミリーの学生のひとりは、ろう学校できちんとしゃべれないため、殴られてばかりだったという。学芸会もしゃべるのが下手だったために出してもらえなかった。親もろう学校でそのような教育を受けており、しゃべれないことは悪いことだと思っていたため、なるべく手話を使わず口話で子どもを育てたという。双方聞こえないのだからほとんど伝わっていなかった、と振り返る。日本社会事業大学で学んだことを家に帰って話すと「そうだったのか。手話で育ててもよかったんだ。」

と今更ながら親が後悔しているとのことである。

そのような状況を作っている日本社会の罪は深い。このプログラムの意味を広く聴者に理解してもらうことが、少しでも口話の抑圧と日本手話話者への差別と偏見をなくすことになることを期待する。

参考文献

斉藤くるみ（2011）「聴覚障害者大学教育支援プロジェクトの取り組み」『社会事業研究所研究紀要』第58集 145-169

斉藤くるみ編著（2017）『手話による教養大学の挑戦～ろう者が教え、ろう者が学ぶ』ミネルヴァ書房

日本学術会議（2017）「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」

毎日新聞　2008年7月2日「熱帯びた『日本手話』での講義―母語で学べぬ痛み共感」

朝日新聞　2020年5月26日「障害ある子もオンライン授業」

読売新聞　2020年7月3日「オンライン授業　障害者に配慮を」

https://www.nhk.or.jp/heart-net/program/rounan/955/

NHKハートネット、「ろうを生きる　難聴を生きる～一緒に"学ぶ"楽しさをもう一度！」
2019年3月23日　午後8時45分 ～ 午後9時00分

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200427/k10012407411000.html

NHK News Web「新型コロナで臨時休校続く 聴覚障害の生徒への学習支援に課題」
2020年4月27日

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200330/k10012357211000.html

NHK News Web「耳が聞こえなくても大学に行きたい」
2020年3月30日

国際教育と教養教育と手話研究
～COILによる日米協同教育

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

Dec.12. 2020

Kurumi Saito (kurumi@jcsw.ac.jp)
Japan College of work

1

日本手話による教養大学のambiguity

解釈1：日本手話を教育言語とする教養教育

- 斉藤くるみ『手話による教養大学の挑戦～ろう者が教えろう者が学ぶ』(ミネルヴァ書房2017)

解釈2：日本手話というものを題材とした（手話研究を基盤とした）教養教育

プロジェクト（2009－2019）三つの柱

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

（「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」
目的は「当事者ソーシャルワーカー養成」

- 手話通訳・PCテイクなどの情報保障
- 日本手話による教養大学
- 手話者と情報保障による高校生のための大学受験塾

3

その他、、、、、

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「日本手話」を語学として入試科目に導入

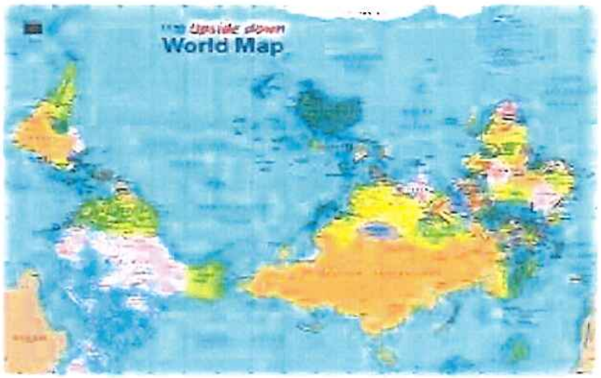
日本手話による動画で修士論文を受理

文科省高認（高等学校卒業程度認定試験）のための
オンライン対策講座を「日本手話」で全国に発信

4

手話による教養大学（初期）

ろう者の講師による人文科学、社会科学、自然科学、芸術、語学（英語・ASL）



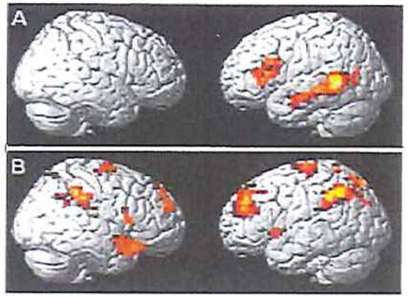
「さかさま」と思うのは私たちの勝手

特に聴者にとって、さかさまの地球儀

- 音のない言語
- 手話がろう者の脳の中で、聴者が音声言語をつくるとの同じ仕組みで作られている。次のスライドへ

(1)認知科学・脳科学と手話の言語権

Straube, Green, Weis and Kircher (2012)
https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0051207



(1)認知科学・脳科学と手話の言語権

I. 言語性・言語の定義の変更
fMRI等で可視化(1989's)
聴者の音声言語とろう者の手話は脳で見ると酷似
音声か手・表情かは表面的なことで言語は言語
音声言語に伴うジェスチャーや無意識に手を動かすことと違う
2.神経回路の再編(rewiring)
早期失聴・早期失明によるrewiring
早期手話習得による視覚認知の開発

(2)言語接触研究と危機言語研究

言語接触

少数言語の宿命(話者はたいていバイリンガル)
聴者が手話を使えば使うほど手話が不完全なピジンになる。
ふつうはピジン→次世代→クレオール→次世代→脱クレオール化
ろうは何代も繰り返すことが少ないので脱クレオール化せず。ピジンという不完全な言語がはびこり続ける宿命・・・
危機言語(「声を出しながら手話しなさい」→ピジンにしかならない→日本手話の機器
言語権・世界人権宣言(国連)・世界言語権宣言(NGO→ユネスコ)・障害者の権利条約からも、「日本手話」は守られる権利がある。

(3)テクノロジーと手話

1. 音声認識と日本手話

まだ不完全だが、完全にできるようになったら、ろう者の社会参加は進むが、日本手話で教育を受ける権利は奪われるかも

2. コンピューターグラフィックによる手話の自動翻訳技術（NHK Tec, J-stage等 ）

瞬時に翻訳できるようになれば人工内耳も要らなくなるかも

3. 人工内耳と日本手話

日本手話者が減り、セミリンガル（完全な言語をひとつも持たない人）が増える

(4)認知科学・心理学と手話教育

“Rewiring”

低年齢で失聴すると脳のシステムが視覚優先に変わる

低年齢で手話話者になると特別な認知能力が発達する

↓↓

早期手話教育の必要性

人工内耳の子どもの半数はrewiring は起きない。

脳は「ろう」のまま。手話をマスターするまで人工内耳を入れさせない、という国もある。

(5)歴史・政策と手話の運命

戦争との関係・アメリカの移民との関係

マジョリティーが分からないことばを使う人の集団ができることを恐れるようになる

手話・口話、教育行政との関係

過去の手話の禁止・声付き手話以外の禁止（現在も）

cf）方言の禁止・点字の禁止も！

15

(6)社会福祉学と手話

「医学モデル」から「社会モデル」、そして「文化言語モデル」

「医学モデル」	「社会モデル」	「文化言語モデル」
↓	↓	↓
人工内耳・補聴器	文字通訳（日本語）	日本手話

障害者の権利条約

第24条3(b) 手話の習得およびろう社会の言語的な同一性の促進を容易にすること。

第30条4 障害者は、他の者との平等を基礎として、その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及びろう文化を含む。）の承認及び支持を受ける権利を有する。

第24条4 手話または点字について能力を有する教員（障害のある教員を含む。）を雇用し、並びに教育に従事する専門家及び職員に対する研修を行うための適当な措置をとる。

（7）倫理学（生命倫理・優生思想）と手話の運命

優生保護法（1948-1996）による聾者への人権侵害（断種手術、中絶、強制避妊）。現在裁判進行中、、、二裁判所が「違憲」！と

人工内耳の手術は、ほとんど本人の承諾がない。

LGBTは18歳まで矯正プログラムが禁止されつつある（アメリカ8州、ドイツ等）

ろうの精子を求める人、排除したい人、どう違う？→本質的には同じ。片方いいなら、両方いい！

教養教育と国際教育

- 当事者ソーシャルワーカー養成に国際性が必要になっている。
  国際ソーシャルワーカーと多文化ソーシャルワーカー
  福祉サービスの現場や特別支援学校にも外国人が増えている
  外国人労働者・技能研修生（介護現場にも）
- *ろう者の強み（advantage）*
  二言語環境の理解・多様性の理解・他文化への柔軟性
- *ろう者の不利益（disadvantage）*
  英語教育・自己肯定感

Bibliography

Bauman, H-Dirksen L. and Joseph J. Murray (eds.) (2014), *Deaf Gain*, University of Minnesota Press.

Gilley, P. M. (2010), The Influence of a Sensitive Period for Auditory-Visual Integration in Children with Cochlear Implants," *Restorative Neurology and Neuroscience*, 28, 207-218.

Gougoux, Frederic, et al. (2004), "Pitch Discrimination in the Early Blind," *Nature*, 430, 6997, p.309.

Olulade, Olumide A, et al. (2014), "Neuroanatomical Profiles of Deafness in the Context of Naive Language Experience," *The Journal of Neuroscience*, Vol. 30, 16:5613

Straube, B., A. Green, S. Weis & T. Kirucher (2012), "A Supra modal Neural Network for Speech and Gesture Semantics : An fMRI Study,"(https://doi.org/10.1371/journal.pone.0051207

Sharma, Anu & Teresa Mitchell, (2013), "The Impact of Deafness on the Human Central Auditory and Visual Systems", Deafness, Vol. 9-2; 1-9

Voss, Patrice & Robert J. Zatorre, (2012), "Occipital Cortical Thickness Predicts Performance on Pitche and Musical Tasks in Blind Individuals," Cerebral Cortex, vol 22 -11. 2455-2464

Weeks, Robert et al. (2000), "A Positron Emission Tomographic Study of Auditory Localization in the Congenitally Blind, *The Journal of Neuroscience*, 20 (7), 2664-2672.

斉藤くるみ (2007)『少数言語としての手話』東京大学出版会

斉藤くるみ (2017)『手話による教養大学の挑戦：ろう者が教えろう者が学ぶ』ミネルヴァ書房

J-Stage (2019/08/20) https://www.jstage.jst.go.jp/static/pages/JstageOverview/-char/ja

NHK Science an technology Research Laboratories (2019/08/20),https://www. nhk.or.jp/strl/index-e.html

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

日米オンライン・シンポジウム

「国際教育・教養教育と手話研究：ギャローデット＝社会事業大学協働授業の試み」

by ギャローデット大学の学生と教員
日本社会事業大学の学生と教員

COIL(Collaborative Online Interinternational Learning) とは

Jon Rubin氏

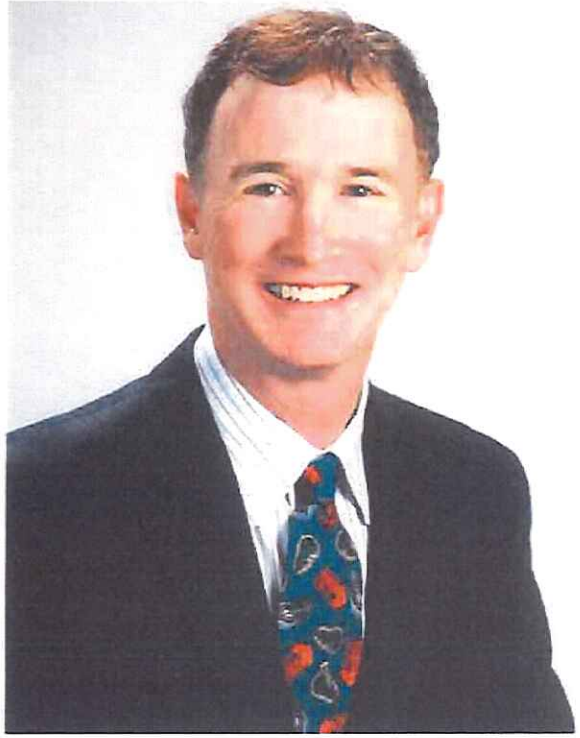
John Rubin
Director of SUNY COIL Center,
the State University of New York's Office of Global Affairs

ジョン・ルビン、Media Artist でもある。COIL Institute for Globally Networked Learning in the Humanitiesは22のアメリカの大学、26の海外の大学を結ぶネットワークがある。

COILは時差があっても協同できる方法で、あらゆるシステムを使って、二か国以上の学生と教員がつながる。クラスを小さなグループに分けてそれぞれが話し合ってSNSを使い、授業が開催されている期間ずっとつながりながら、動画などのやりとりで、アクティブラーニングを行う。

Gallaudet=JCSW collaborative learning

Charles Reilly氏



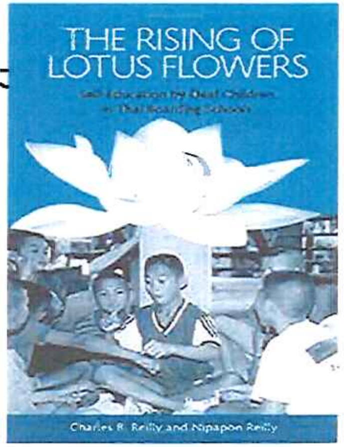
Senior International Officer , Office of International Affairs

Research Support and International affaires (RSIA)

ギャローデット大学国際部長、研究支援・国際部

The Rising Of Lotus Flowers: Self-Education By Deaf Children In Thai Boarding Schools (Sociolinguistics in Deaf Communities)

タイのろう学校で、寮で暮らす6歳～19歳の400人の子どたちが学び合っている。授業外のほうがはるかに多くの知識を得てている。特にタイ手話がデフファミリーの子どもからの子どもから、どのようように全体に広まっていくかを観察した。そのタイトルは子どもたちの言語・知識を蓮の、花が水の中から花開く様子に例えたもの。



COILの教材と学生たちの活動

- Signing Black in Americaのバイリンガル字幕つき動画Signing Black in Americaの動画(5:00-10:00)
- https://www.youtube.com/watch?v=Fj8T503IexI&feature=youtu.be

・日本手話とろう文化のバイリンガル手話動画

- https://www.youtube.com/watch?v=cVKVyhV9ULw&feature=youtu.be
- ・History through Deaf Eyes
- https://www.youtube.com/watch?v=l5gOQsgwD0I&feature=youtu.be

・Google Classroom とZoom(ギャローデットとつなぎます。)

日米ろう学生にとっての意義

日本のろう学生にとって

- 自らの国際性に気づかせる
- 自己肯定感を高めるロールモデルとしてのアメリカ人ろう学生

  →Deaf Gain
- 英語力等コミュニケーション能力を高める

アメリカのろう学生にとって

- ろう世界の多様性を知る――特にアジアに目を向ける

  アメリカだけが世界ではない！

コミュニケーション

アメリカ手話・日本手話
英語・日本語の4言語
Google　Classroom
Facebook/Twitter/WhatsApp
なんでも使う！！

新しいHP

https://deafkokusai.com/index.html

https://deafkokusai.com/college.html

https://deafkokusai.com/coil.html

https://youtu.be/H1Q3RiwPYcA

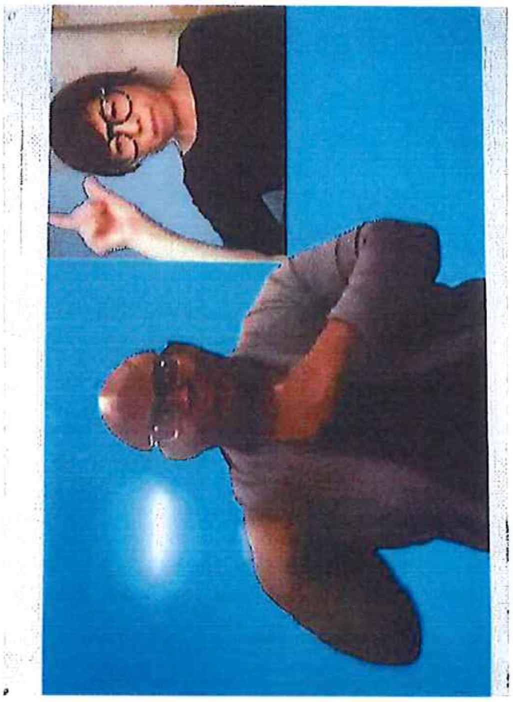
COILの教材と学生たちの活動

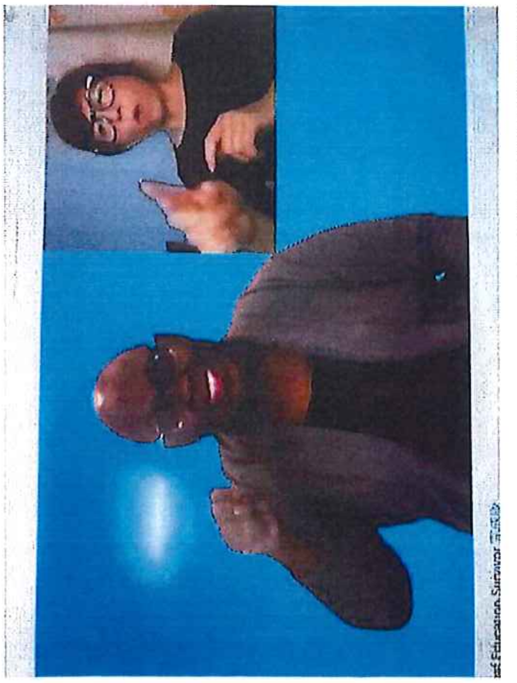
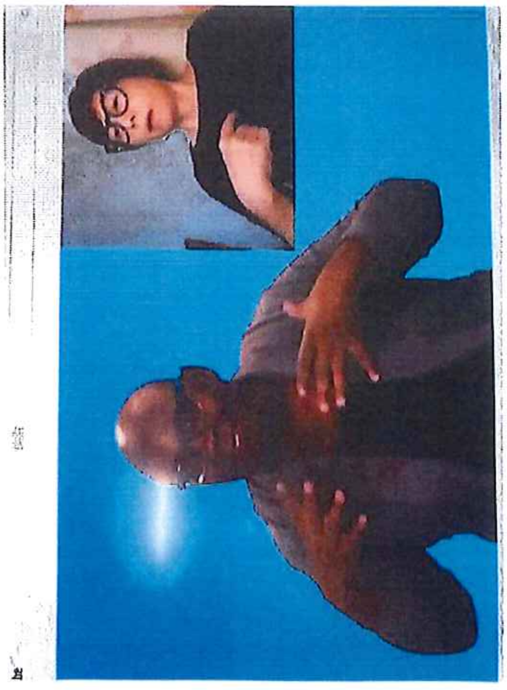
- Signing Black in Americaのバイリンガル字幕つき動画Signing Black in Americaの動画(5:00-10:00)
- https://www.youtube.com/watch?v=Fj8T503IexI&feature=youtu.be
- ・日本手話とろう文化のバイリンガル手話動画
- https://www.youtube.com/watch?v=cVKVyhV9ULw&feature=youtu.be
- ・History through Deaf Eyes
- https://www.youtube.com/watch?v=l5gOQsgwD0I&feature=youtu.be

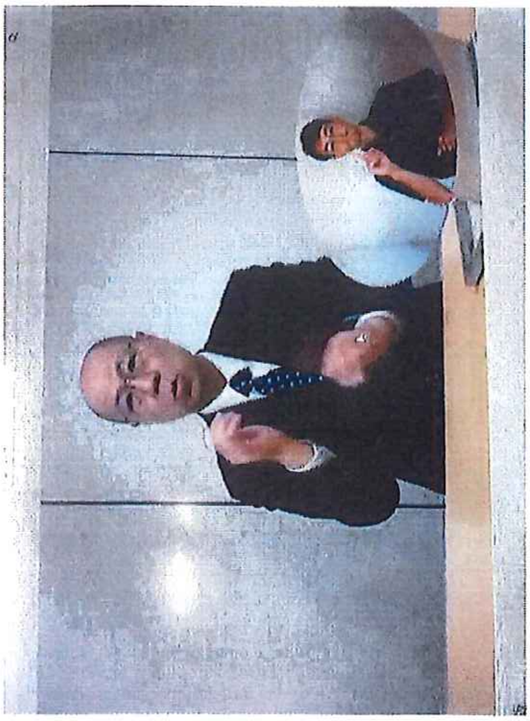
・Google Classroom とZoom(ギャローデットとつなぎます。)

COIL のバイリンガル教材

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION





YouTube
検索
先生 SW 完成版

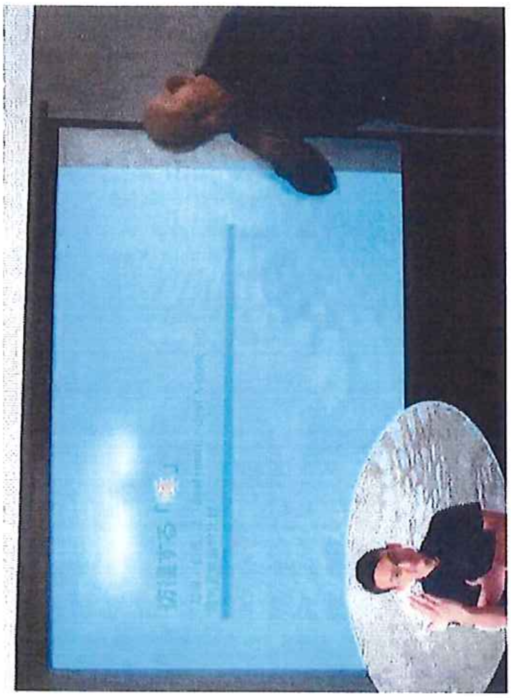
YouTube
検索
先生 SW 完成版

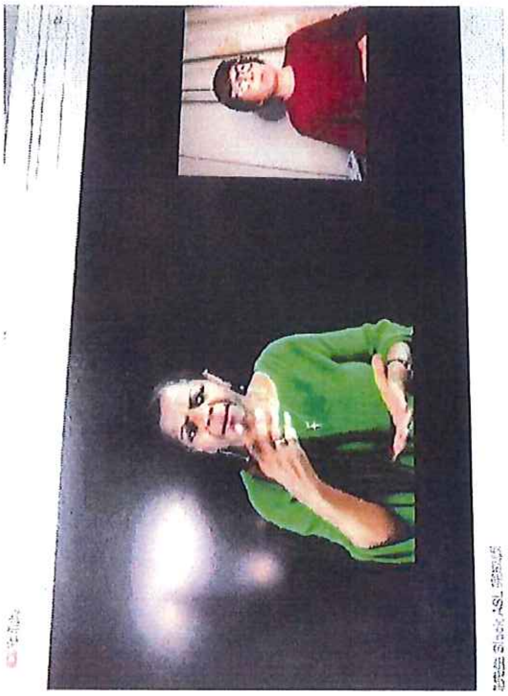
検索

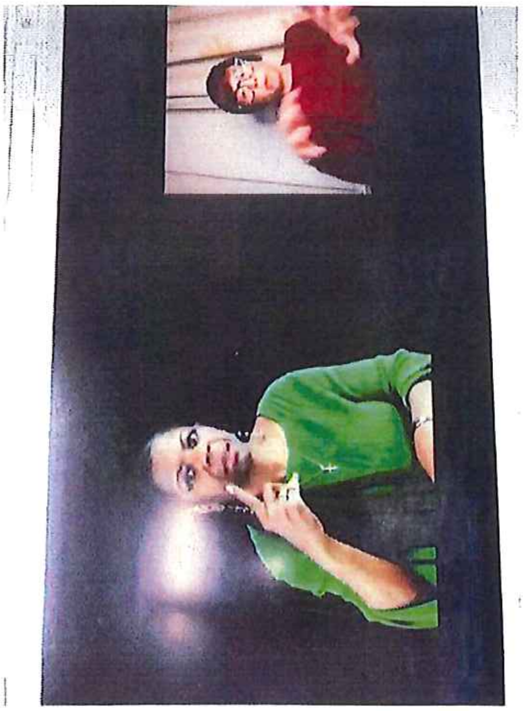
検索
先生 SW 完成版

日本社会事業大学 2020夏

日本社会事業大学 2020夏







Mmmm. Nope, mm-mmm.

You can't use that church finger.
「そのchurch finger(幸運を祈って)やめて。」

And they also have
ジェスチャーや行動の傾向というものもあります。

gestural and behavioral tendencies
ジェスチャーや行動の傾向というものもあります。